375.9
M014
資料室

# 村の子ども

文部省著作教科書

私たちの生活（一）

60002
教科書文庫
6
300
34-1949
20000
19828

395.9
M014

廣島大學圖書之印

資料室

いはばしる
たるみの上の
さわらびの
もえいづる春に
なりにけるかも

もくじ

一、五年になって……一
二、委　員　会……八
三、さまざまの協力……一七
田うえ（第二はん）……一七
田うえ時（第三ぱん）……一九
大昔の狩（第五はん）……二五
昔の漁業、今の漁業（先生）……三三
漁業部落の見学（第四ぱん）……四四
まぐろ延縄の話（第四ぱん）……四六
四、誕　生　日……五三
五、夏休みの計画……七〇
六、夕御飯のあと……八七
七、町からの手紙……九五
八、新聞やラジオのなかった時代……一八
学校へいく路……一三
（附）教師及び父兄の方へ

広島大学
19828
図書

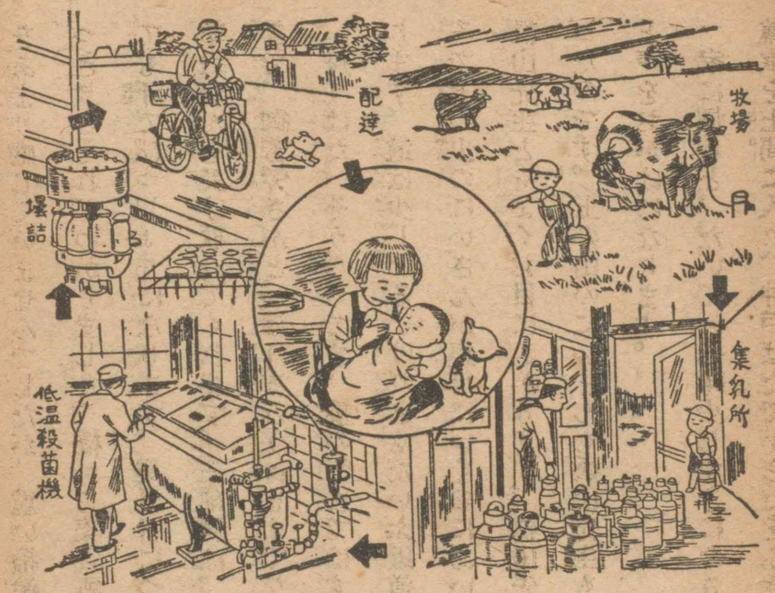
廣島大學圖書之印

## 一、五年になって

三郎君もいよいよ五年生になりました。急ににいさんになったような氣がして得意です。教室も二階になり、窓からは運動場で下の学年の子どもたちが遊んでいるのがよく見えます。しかし三郎君の得意なわけはほかにもあります。それはこんどから、おとうさんのかわりに、毎朝牛乳をとなり町の集乳所までもっていくようになったことです。

五時半に起きて、床をかたづけ、顔を洗い身じたくをして、牛小屋にいくと、おとうさんが、牛乳の輸送かんを用意しておいてくださいます。三郎君は、それを自轉車につんで、すぐ出発するのです。家からとなり町の集乳所までは、およそ三キロあります。だから六時半までにもっていくのにはおおいそぎです。けれども、このごろのように氣候のよい朝、縣道を自轉車をとばしていくのはゆかいです。ことに松崎橋まではくだりですからいい氣持です。

三郎君が口笛を吹きながら走っていくころは、もう春の日はかなり高くあがっていま




す。右がわの家々のかげになっている
まつ林のむこうから、太平洋の波の音
がきこえてきます。あたりの麦畑から
は、しきりにひばりのさえずる声がし
ます。たんぼでは一寸そらまめがいっ
ぱい実をつけています。西の方の山々
にはかすみがかかっています。鎭守の
森をはずれると急に景色がひらけて、
右手に海が見えはじめます。そしてそ
のむこうに、となり町の家々があらわ
れてきます。松崎橋を渡ると、道は少
しのぼりになります。これまで三郎君
は、ここからのぼりになるということ



をあまり感じていませんでしたが、重い輸送かんを自轉車ではこんでみて、はじめてはっきりとそれがわかりました。橋から集乳所までは、約一キロですが、いきにはどうしても汗でびっしょりになります。集乳所につくと、組合の人が「御苦労さん」といって輸送かんを受け取ってくれます。三郎君は、この無口な組合のおじさんがなんとなくすきで、御苦労さんといわれるとうれしくてなりません。

帰りはたいそうらくです。橋の所まではすぐきてしまいます。橋の所からは旧道を通ります。道は少しわるいけれどもだいぶ近道になります。帰りにはきまって、橋のところで上の山のにいさんが銀行にいくのにあいます。そして鎭守さまの裏手あたりでは、松山先生ともよくお目にかかります。松山先生は、一昨年となり町の学校に御栄轉になったのです。上の山のにいさんも松山先生も、三郎君を見るとにこにこして、「よう」と声をおかけになります。

家に帰ると、たいてい七時少しすぎになります。からの輸送かんを牛小屋へ置き、自轉車を土間に入れ、井戸ばたでからだをふき、手足を洗ってあがると、もう朝食のした

くができています。おかあさんは、いつでもコップに牛乳をいれておいてくださいます。三郎君は、このしぼりたての牛乳をのむのが樂しみです。往復六キロの自轉車のりのあとでは、たいそうおいしいのです。

朝食をすませて、かばんにいれていくものをもう一度しらべているころには、もうおとなりの弘君がさそいにきます。弘君は三年生です。学校へは、近くのものがみんなさそいあわせて



いくのです。途中に鉄道のふみきりがあるので、三郎君や近所のくに子さんは、とくに下の学年の人たちを残さないようにつれていくことにしています。

学校は三郎君の家から約一キロ、村役場のとなりで縣道に面しています。三郎君もくに子さんも学級の新聞係の委員ですから、教室にはいると、すぐ掲示板をしらべたり、投書箱をのぞいたりして、それから道具をおいて運動場に出てみんなと遊びます。

こん学期のはじめ、先生からのお話によって、三郎君たちの組は次のようなことをきめました。

一、人々の生活のしかたを進んでしらべよう。

二、自分たちの生活を少しでもよくするためにはなんでもしよう。

これが、学級の標語になって、教室の前の壁にかかげられています。字は級長の山本君が書いたのです。学級新聞も、この標語を実行する方法の一つとして、学級自治会できまったことなのです。学級新聞の委員は、三郎君やくに子さんのほかに、上田進君、金子すみ子さん、上田はる子さんの三人がいます。毎週木曜日までに、学級のものがみん

なに知らせたいと思うことや、みんなが知っておいた方がよいと思うことを、ニュースとして紙に書いて、投書箱に入れておくことになっています。そのニュースには、なるべく絵をつけようときめたのです。ニュースのほかに、歌や俳句や詩やなぞなぞや問題などを出す人もいます。金曜日の自由研究の時間に委員たちが集まって、これらを壁新聞として掲示板にはり出すもの、とうしゃばんにするもの、口でみんなに知らせるものの三つに分けるのです。はじめはなかなかうまくいきませんでしたが、このごろはみんなむちゅうです。委員は金曜日が待ちきれず、木曜日の放課後、すみ子さんの家に集まってえりわけをし、金曜日には壁新聞をつくったり、とうしゃばんの原紙を切ったりするようになることが多いのです。きょうもたぶん、すみ子さんの家で委員会をすることになるでしょう。

**次のような事を考えてみたり、してみたらどうでしょう。**

1、朝学校にくるまでにすることをしらべて話しあってみること。

2、集乳所に集められた牛乳は、どこへいくかをしらべてみること。



3、近道のつごうのよいところとわるいところとを考えてみること。

4、きまった時刻にきまった道路を通る人は、どんな人たちかしらべてみること。

5、登校の途中の安全に関する注意を書きあげてみること。

6、一つの道路を選んで、ある場所の交通量をしらべること。

7、学級の標語についてそのよしあしを考えてみること。

8、自分の研究しようと思っていることを表にすること。

9、学級の人たちの手つだいのありさまをしらべること。

10、病氣の予防法をしらべること。

11、学級新聞を発行すること。

# 二、委　員　会

すみ子さんの家は進君の家のはなれです。おとうさんは東京の病院にお勤めで、一週間に一、二回お帰りになります。すみ子さんが一年のとき、この土地に疎開してこられたのです。ふだんは、二年の正雄さんとおかあさんと三人でくらしていられます。土地の人たちも、病人ができると、すみ子さんのおとうさんのおせわになるので、東京にお帰りにならないといいな、などといっています。

荷物はほとんど進君の家の土蔵にしまってあって、八畳と六畳の二間に台所ですが、たいへんゆきとどいた氣持のよい生活をしていらっしゃいます。木曜日は、たいていおとうさんがいらっしゃらないので、新聞の委員たちがおじゃまするのです。八畳の座敷のえんがわよりに、テーブルを出して、みんなで相談するのです。

テーブルの上には、みんなの原稿がのっています。五人の委員は、めいめい、それをとって、楽しそうに読んでいきます。



進「石井君のところでは、もう苗代をつくるそうだ。」

はる子「まあ、ずいぶん早い。」

進「きっと村でもいちばんだろう。」

すみ子「どんなことが書いてあって……。」

進「うん、読むよ。きのうおとうさんが種もみをえらびました。かめに水を入れ、塩をまぜて、種もみを入れ、よくかきまわして、浮いてくるのをすくいとって、沈んだ種もみだけをえらぶのです。塩をけんやくするために、二斗もある種もみを、何回にも分けてするのでたいへんでした。ぼくはえらんだ種もみを、ま水で洗って、塩けをのぞくのを、手つだいました。おとうさんは俵に入れて、裏の川につけました。苗代田は、もうすきおこしがすんで、水がはってあります。二、三日ちゅうにしろかきをして、種をまこうといっています。ぼくが手つだってえらんだ種もみですから、じょうぶな苗に育ってくれればよいと思っています。

種もみ、種もみ、

うんとすえ。
流れの水をうんとすえ。
みんなそろって
つよい苗になるんだぞ。」

すみ子「まあ、おもしろい、石井さん、ずいぶん、りきんでるわねえ。」

三郎「石井君はきっと、苗代のニュースをつづけるよ。」

進「みんなも、きょうそうで書くよ。」

くに子「新聞が、たんぼの話ばかりになってしまうわ。」

はる子「そんなことはないわ。蚕のこともあるし、遠足のこともあるし……。」

進「そうさ、いろんなことがありすぎるくらいだ。」

くに子「ほんとにそうね。だけど、新聞も、たんぼのことばかりのせるのも、ときには
おもしろくないかしら。」

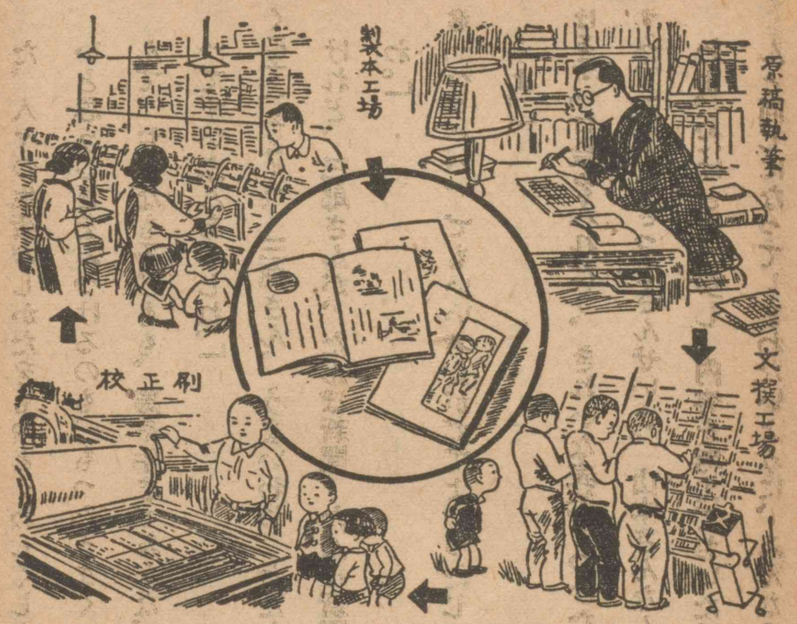
三郎「たんぼ新聞、たんぼ新聞ってくばろうかな。ハッハッハ。」



すみ子「でもそれでは、新聞らしくなくなってしまうでしょう。」

くに子「そうね……。」

ちょうどすみ子さんのおかあさんがお茶をもってきてくださいました。これは進さんのおかあさんからよといって、どんぶりにそらまめの塩うでを山もりくださいました。すみ子さんは、テーブルの上を片づけて、みんなにすすめました。お茶をいただきながら、みんなは原稿を見たりしていますが、三郎君は、さっきから何か考えこんでいるようすです。時々思いついたようにお茶をのんだり、そらまめをたべたりしますが、しきりに頭をひねっています。しかしほかの四人は、自分の仕事にむちゅうで氣がつきません。「ただいま。」と元氣な声がして、正雄君が帰ってきました。おかあさんが、「手を洗いなさい。」といっていらっしゃいます。となりのへやでおやつをいただいた正雄君は、三郎君たちのところへきて、「ぼくにも見せて。」とねだります。すみ子さんは、「ちらかしてはだめよ。」といいながら、絵の多いのを五、六枚かしてあげました。正雄君もなれているとみえて、おとなしく、絵を見たり、字をひろい読みしたりしています。




三郎「進君、ぼく、こういうことを考えたんだけれど、どうだろう。」

進君も、くに子さんも、みな、三郎君の方を見ました。

三郎「さっきのくに子さんの考えね、あれはおもしろいと思うんだ。みんながたんぽのことをたくさん書いてくれるときには、それをだんだんひとまとめにして、本にしてかいらんするんだ。村のたんぽとかなんとかいう名まえをつけてね。」

進「作文のかいらんみたいに？」

三郎「うん、そうすれば、学級できめ



た、人々の生活のしかたをもっとくわしくしらべるということも、みんなでやるといいと思うことをみつけるのも、もっとうまくいくと思うんだ。すきかえし・田うえなんて、おとなも子どもも、馬や牛までみんなでやるんだろう。みんなのお手つだいだってずいぶんあるしね。」

くに子「そうよ。三郎さん、うまいわね。わたしも、なにかそんなような氣がしたんだけれど、三郎さんが、たんぽ新聞、たんぽ新聞なんていうから、おかしくなったんだわ。」

進「ハッハハ。でもいい考えがでてよかったじゃないか。みんなや先生に相談してみようよ。」

はる子「口絵を入れたり、きれいな表紙をつけたりしましょうよ。」

すみ子「みんなきっとさんせいよ。山本さんなんか、だいさんせいなんて、とびあがるわよ。だけどもう少し、内容を考えておいたほうがよくないかしら。ふつうのかいらんと同じになってしまわないように、みんなの書いたのが、うまくつづいていかなく

ちゃだめでしょう。」

三郎「そうだね、みんなも、きっとそれをきくね。ぼくたちで計画をつくってみようよ。」

五人はしばらく話しあっていましたが、まもなくこんな案ができました。

本の名　たんぼでの協力
締切　農はん休みまで
内容　はしがき
もくろく
口絵
苗代
田うえ時　とり入れのころ
供出
たんぼの水
田の草とり　ぼくたちの仕事の一らん表
二百十日



仕事がわきみちにそれたまま、だいぶおそくなってしまいました。三郎君たちは、おおいそぎで、壁にはるものと、するものとをよりわけると、テーブルをかたづけ、すみ子さんのおかあさんにごあいさつをして散会しました。三郎君とくに子さんは、帰りにもこれからつくる本のことを話しあっていました。

新聞の委員たちの考えは、そのつぎの学級自治会のときに、みんなで、いろいろなおしたり、つけ加えたりしましたので、こんなふうにかわりました。

本の名　さまざまの協力
締切　六月末
内容と分たん
表紙……美術はん
はしがき……新聞はん
もくろく……新聞はん
口絵……（けんしょう）
田うえ時……第二はん
第三はん

養……第六ばん
茶つみ……第一ばん
大昔の狩……第五はん
昔の漁業、今の漁業……先生、第四ばん

**次のような事を考えてみたり、してみたらどうでしょう。**

1、疎開してきている人たちの職業をしらべてみること。
2、疎開の人たちが村のために役だっていることを考えてみること。
3、種もみの保存のしかたやまきかたをしらべてみること。
4、苗代のつくりかたをしらべてみること。
5、本ができあがるまでのありさまを、昔と今とくらべてみること。
6、自分たちで本をつくるには、どんな準備が必要か考えてみること。
7、自分のいる場所や身のまわりを氣持よくするくふうをすること。
8、みんなの意見をまとめ、きめられたことを実行するには、どんな注意が必要か考えること。
9、委員のえらびかた、委員としての仕事のしかたを考えてみること。
10、学級の人たちの学習する態度をよく見て、自分の態度とくらべてみること。



## 三、さまざまの協力

### 田うえ　第二はん

ことしもつゆをむかえて田うえをしました。

私たちのおとうさんおかあさんは、かさをかぶり汗を流しながら、牛をおいおい、一年じゅうたべるお米のつくりはじめに、苦心なさいます。

このころは、もう感心なつばめが日本に帰ってきています。「やあ、帰ってきた。」とみんなで迎えながら、田うえの仕事をします。おとうさんやおにいさんは、牛につけたすきのうしろにつかまりながら、どろ水の中をいったりきたりして、田うえの用意をします。

この用意のできた水田には、なわをはり、おかあさんやおねえさんが苗をはこんで、水田にはいって手早くうえていきます。

おかあさんをまっている赤ちゃんは、田のあぜ道にしいたむしろの上で、小さなにい

さんやねえさんに子守をしてもらっています。おかあさんがそばにくると、おちちがほしいのか、べそをかいてだかれたがります。するとおかあさんは、どろの手を見せて「だめだめ。」とくびをふります。赤ちゃんはききわけがなく、なきながら、おかあさんにだかれようとします。おかあさんはあやしながら、「ほら、とっと、とっと」とつばめをゆびさします。赤ちゃんがその方を見ているうちに、おかあさんは、またいそがしそうに田うえの方にいかれます。

ひるごろになると、学校にいっている一、二年生の子どもたちが帰ってきます。赤ちゃんはさもうれしそうに笑い、手をふるようにして迎えるのです。田ではたらいていた人たちも、そこでおべんとうをひらいたり、家に帰ったりしておひるにします。おひるごろは、たんぼも一時静かになり、おべんとうをたべている人たちの笑い声や、かえるのなく声が、はっきりときこえてきます。

ひるからは、またみんないっしょうけんめいに働きます。夕方になると、馬や牛もだんだんつかれてきたらしいようすを見せます。それでもみんなはげましあって、暗くな



るまでやります。

もうあちらこちらにうえつけのすんだ田が見えてきました。そして、ひるまはえんりょしていた、かえるのなく声がはげしくなってきました。」

これは、ともえさんの書いた文です。二はんの人たちの、田うえのようすを書いた文の中で、ともえさんがえらばれたのです。

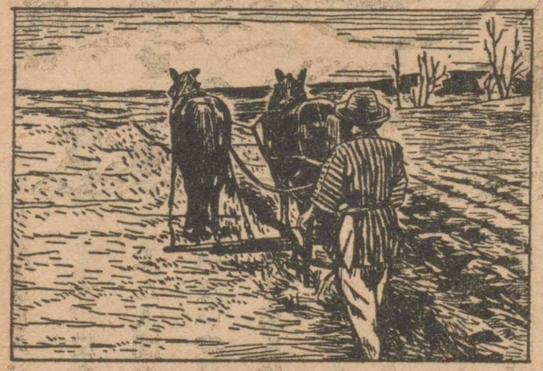
## 田うえ時　第三ばん

田うえの時は、一年じゅうでいちばんいそがしい、しかしまた、それだけ楽しみも多い時です。おとうさんもおかあさんも、にいさんもねえさんも、おとなりの家の人も、手つだいの人も、牛も馬も、だれもかれもがいそがしい時です。

見わたすかぎりのたんぼはどこも人でいっぱいです。年よりも子どもも、男も女も、家じゅう、村じゅう総出です。よその家、よその村からも手つだいの人がきています。お茶やおひるのときには、あちらでもこちらでもにぎやかな笑い声がします。

ぼくたちは、田うえのときにみんながどんなに助けあっているか、ということを考え

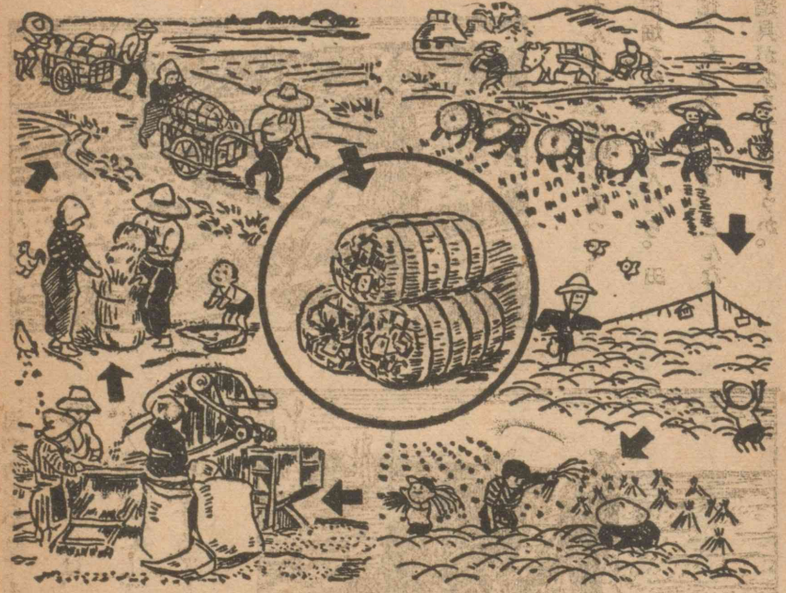
かんたんな道具を使って、田畑をたがやす人たち。田畑をたがやすには、どんな道具があるでしょうか。



馬の力をかりて土地をたがやす人。馬や牛は、そのほか、どんなふうにして、人々の手だすけをするでしょうか。

トラクターを使って土地をたがやす人。どんな所で使うとつごうがよいでしょう。





たりしらべたりします。

一、田を起すには、牛や馬が、ずいぶん人間の手助けをします。牛や馬のいない家は、なかなか骨がおれます。牛や馬を借りてやる家もあります。牛や馬もずいぶん働きますから、田うえのときは、特別にごちそうをしたりして、いたわってやります。はなをひっぱらないでも、どんどん田を起していく馬や牛を見ると、ほんとうに感心だと思います。

二、牛や馬のひくすきや、人のつかうまんがが、仕事の進みぐあいに関係

することもたいしたものです。これらの農具は、村のかじ屋や町の工場の人たちがつくってくれたのです。田うえの前には、どの家でも農具をしらべて、ぐあいのよいように手入れをしたり、たりないものをととのえたりします。

三、起した田には、十分肥料をやらなければなりません。つみごえは家ごとにつくりますが、金肥がたりないので、このごろは、どの家でも苦労しています。農業協同組合の配給では、なかなかたりないといっています。組合のおじさんにきいてみたら、肥料がたりないのは、たくさんの肥料工場が使えなくなったり、原料にたりないものがあったりするためもあるが、やはり石炭や電力がたりなくて、工場の生産があがらないからだと教えてくださいました。工場の人たちは、それでも食糧増産の源ですから、いっしょうけんめいにたくさん肥料をつくるようにつとめていてくれるのです。また石炭を掘る人たちも、肥料の生産がどんどん行われるようにと、夜も晝も、地下の炭坑で働いているのです。ひとにぎりの石灰窒素にも硫安にも、石炭を掘る人、工場で働く人、製品を輸送する人、これを配給する人たちの、たんせいがこもっていることを思うと、田う



えには、こういった人たちもいっしょに働いているようなものです。

四、おとうさんたちやおにいさんたちは、牛や馬や農具や肥料の心配をするほかに、水のことや手つだいのことも相談しなければなりません。田うえはその年のみのりにたいへん関係しますから、村では、昔からみんながよく相談しあって、みんなのつごうがよくなるようにくふうし、助けあっています。水のことも、耕地整理のできている所ではわりあいにらくですが、そうでない所では、なかなかたいへんです。毎年のしきたりをもとにして、よくよく相談しあって田うえの順番をきめ、助けあいのしかたをきめます。

いよいよ田うえにかかるとなると、どうしても手がたりなくなります。ですから、近所となりで助けあったり、となり村の人をたのんだりしてやります。疎開の人たちでも手つだう人があります。金子さんのおかあさんも、上田さんのうちの田うえを手つだわれるので、みんな感心しています。

五、田うえのときは、どこの家でもいそがしいので、炊事もおかあさんがしないで、

おばあさんがなさったりします。子どもも、お茶やべんとうをたんぼにはこんだりします。手つだいの人がきたりすると、炊事はよけいたいへんです。前には、この村でも、部落によっては共同炊事をしました。食糧があまりきゅうくつになったのでやめていますが、そのうちまた行われるようになるでしょう。

六、三年から上の子どもは、家の手つだいができるので、農はん休みになりますが、一、二年の子どもは学校へいきました。赤ちゃんはまだよいのですが、はいはいする子や、よちよち歩く子は、どこの家でもしまつに困ります。また学校へはいる前の五つ六つの子も、おかあさんたちがいそがしいので、うろうろして、あぶないことをしたりします。それで、大きい子どもたちが子守をします。西の部落では、疎開の女の人たちが女子青年と相談して、農はんたく兒所をひらきました。砂場やぶらんこもできました。町の女学校からも手つだいの生徒さんがきてくれました。

七、田うえのときは、一度に手がたくさんいるので、どこでも非常にいそがしく、みんながほんとうに氣をそろえて働きます。だからたいそうゆかいです。みんなの助けあ



っている生活が、どこにも見られます。私たちの研究はまだまだたりないと思いますが、みんなでもっとつけ加えてください。」

これは三ばんの人たちが、話しあってまとめたものだそうです。

## 大昔の狩　第五はん

私たちは、大昔、まだ人間が今日のような便利な生活をしていなかった時代に、人々が食物を手に入れるためにどんなくふうをし、またどんなに力をあわせて働いていたかをしらべてみました。

はじめは、なかなかよい本もなく、どうしてしらべたらよいのかわからなくて、たいそう困りました。先生におうかがいしたら、「村役場にいる森さんが、たいへん勉強家で、本をたくさんもっていらっしゃるから、何かあるかもしれない。あした森さんにお願いしてみますから、もしよいとおっしゃったら、いってきいてみてごらんなさい。」といわれました。

二、三日たって、先生のお話があったので、山本君とよし子さんが役場にいきます

と、森のおじさんは、大昔のことを書いた本を何冊も見せてくださいましたが、そのうちでいちばんやさしいのをお借りしてきました。

しかし、みんなで読んでみると、あまりいろいろのことがたくさん書いてあって、どうまとめたらよいかわかりませんでした。一時は、やめてしまおうかとさえ思ったのですが、しかしみんなで元氣を出して、読みながら必要なことだけを書きぬいてみました。

ところが書きぬいて、こまかく読んでみると、はっきりしないところや、わからないことがたくさん出てきました。みんなで字引もひいてみましたが、それだけではまだまだはっきりしません。そこでもう一度、こんどははんのものがみんなで、森のおじさんにわからないことをおききして、そのお話と本の書きぬきとをまとめて、つぎのような文にしました。

大昔の人々は、自分が住んでいる土地にはえている植物の芽や、くき・葉・根・実などを取り、自分よりも力の弱い、あまりすばしこくない動物をとらえて、食物にしてい

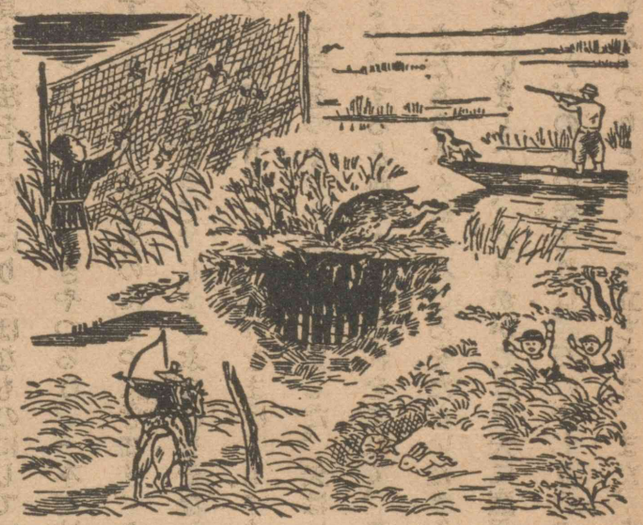


ました。また、動物の皮や、植物の葉などをきものにし、自然のほら穴などをすまいにしていました。それは、あまりほかの動物とかわらない生活です。身ちかに食物になる植物がなかったり、動物がいないときは、野山をかけまわって、さがしてあるいたことでしょう。けれども、一日じゅう野山をかけまわっても、えものが手にはいらなかったこともあります。そんなときには、食物がないままでがまんしていなければなりませんでした。

そういうことをふせぐためには、えもののたくさんとれるときに、できるだけたくさんとっておく必要があります。木の芽、草の芽のはえる春さきや、果実がみのる時期、根のとりやすいころには、いっしょうけんめい、それをとって集めました。魚のたくさんとれるとき、けだものがたくさん集まっているときなどは、もっともよい機会です。しかし、植物の場合は、逃げていかないからよいのですが、動物の場合は、足やつばさがありますから、へたをするとたちまち逃げられてしまいます。

人々は、動物をうまくつかまえるために、いろいろなくふうをこらしました。はじめ

は、ただ手でとらえたり、手ごろな石や木ぎれを使って、これをなげつけたり、ついたり、さしたりしていましたが、やがて石にさいくを加えて、なげやすく、ねらいやすいようにつくることをはじめました。また弓を発明して、矢のさきに小さな石のやじりをつけたり、棒きれのさきに、するどい石や骨をつけてやりにしたり、あるいはまた、かんたんなしかけのわなや、落しあなをつくって、動物をとるようにもなってきました。



このような方法は、ながい間のくふうや苦心によってだんだん発達してきたものです。だれかがふとしたことからよい方法を思いつくと、ほかの人たちもそれをみなら



い、さらに新しいくふうを加えたり、ほかの方法をあわせ用いたりして、いろいろな道具や方法をしだいにりっぱなものにしていったのです。

たとえば、草のくきやつるは、一本だけでは弱いが、これを何本かよりあわせれば、ずっとじょうぶなものになってきます。このことを発見した人があってから、人々は、それをみならって、じょうぶなひもやなわをつくるようになりました。一方、木の枝や竹の枝が弾力にとみ、これをまげてもすぐもとにもどることを應用して、前のひもを使って弓をつくった人もありました。矢ははじめ、細いまっすぐな枝を使ってみたのでしょう。すると他の人々もこれをまねて、さかんに使うようになってきます。

またある人々は、石ころをたたいたりみがいたりして、するどい道具にすることを知っていましたが、だれかがこれを矢に應用して、矢のさきに石のやじりをつけてみました。ただの木の矢よりは、石のやじりのついた矢の方が、うまくえものにあたり、しかもぶっつりと深くつっ立ちます。また、ある人々は、石のやじりをつけることは知らなかったかわりに、矢のうしろに鳥の羽をつけて、矢をまっすぐに飛ばせることを発見し

ました。この二つの発明がむすびつけられて、石のやじりと羽のついた矢ができてきました。

この弓矢のできた順序は、はたしてこのとおりであったかどうかはわかりませんが、しかし、はじめからひとりの人が、りっぱな弓矢をつくるようになったのでないことだけはたしかです。一本の矢にも、数知れない人の発見とくふうとがふくまれているのです。弓矢ばかりではありません。きものにしても、家にしても、その他の道具にしても、どれもこれも、たくさんの人々の努力と苦心がつみかさなってできたものです。

人々は、はじめ、人間よりも力の弱い、小さなのろまの動物だけをとっていました。けれども、いろいろな方法を考えつき、しだいにりっぱな道具をつくるようになると、それを使って、すばしこい動物や、大きなけだものもとれるようになり、だんだんと自信もついてきました。

けれども、せっかく動物の大群をみつけても、そのうちの一匹を殺してしまうと、ほかの動物は、すわいちだいじとばかりに逃げさってしまいます。これでは、どんなにたくさんの動物のむれをみつけてもなんにもなりません。ことに、大きな、力の強い、おそろしい動物の場合には、ひとりでは手も足も出せないわけです。

ですから人々は、そのような動物のむれをみつけた場合、あるいは、動物のむれをみつけようとする場合、近所の者がつれだって出かけていき、協力して一度に全部をとらえようとしました。

アメリカには、バイソンという野牛が非常にたくさんすんでいたそうです。大昔のアメリカインデアンたちは、このバイソンのむれをみつけると、部落の男が全部出ていってこれを三方からとりかこみ、大声をあげたりさわいだりして、バイソンをおどかし、しだいしだいに谷の方に追いつめていきました。バイソンは人々の声におどろいて、人のいない方へ逃げていき、とうとう谷のがけからころげおちて、死んだりけがをしたりして、人間にとらわれてしまったということです。

こんな場合も、大群にむかって、ひとりだけでかかったのでは、かえってバイソンのためにやられてしまったかもしれません。みんなで協力したからこそ、一度に多くのバ

イソンをとることができたのだと思います。人間がほかの動物をずんずんひきはなして、やばんな生活から今日のような進んだ文明の生活をするようになったのも、一つにはほかの人のよいやりかたをみならったり、それに自分でくふうを加えたりしたためですし、また自分のちえをほかの人々にもかして、強いけだものや、自然の暴力の前に、力をあわせてきたためです。

## 昔の漁業、今の漁業

先　生

大昔の人たちは、野や山で鳥やけだものをとるほかに、海や川などで貝や魚をとって食物にしていました。

狩のほうは時代が進むとともにだんだんおとろえて、毛皮のとれるけだもののいる北の國をのぞいては、ほとんど樂しみが主となってしまいました。しかし漁の方はだんだん進歩し、現在でもこれによってくらしを立てている漁師の人たちがたくさんいます。もちろん、今の魚のとりかたは、昔のとはずっとちがっていますし、漁師は、自分たちがたべるために魚をとるのではなくなりました。とった魚や貝は、これを賣っておかね



にし、そのおかねでお米や野菜や着物を買ったり、住居や家財をととのえたりしているのです。一方そのおかげで、町に住んでいる人や、海からはなれた土地や山に住んでいる人も、魚をたべることができるようになっています。わが國では、魚は動物性の食品としても、農作物の肥料としても、きわめてたいせつなものなので、漁業が重要な産業の一つになっているわけです。

大昔の人は、どんなにして魚や貝をとったでしょう。網もなく、つりばりもないころには、どうして魚をつかまえることができたのでしょう。貝は潮のひいた時に、浜やいそを掘ってとればよいのですから、あまり苦勞はしなかったことと思われます。しかし魚は、そういうわけにはいきません。

あなたがたが、なんにももたずにいそにいって、魚をみつけたらどうしますか。きっと魚をせまい浅い所に追いこんで、手づかみにするでしょう。大昔の人たちも、はじめはそんなやりかたで魚をとったのだと思います。

けだものをとるのにやりを使うようになってきてからは、魚をとるのにもやりを使い

ました。しかし大昔はやりといっても、さきは金属でつくったものではありません。とがった石のかけらや、けだものの骨などでつくったのです。これで魚をついてとるのです。海や川の岸にいて、水中の魚をつくばかりでなく、だんだん深い所にはいっていって、およぎながらついたり、もぐってついたりするようになりました。この魚をつくことは、現在でも方々でやっています。たとえば、つきんぼうといって、もりでまぐろをついてとる方法は、房州の南の海岸の漁師がやっています。くじらをとるのも、このやりかたの進歩したものといえます。

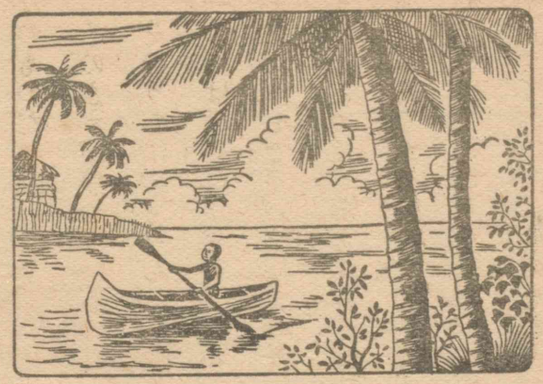
人間が金属を使うようになったのは、たいへんな発明ですが、どこのだれがはじめたということはいえません。しかし、おそらく何代も何代もかかった経験の結果だったでしょう。金属を使っておのや小刀やなべなどをつくるようになってからは、つりばりも金のものを使って魚をとることがはじまりました。つり糸も、きっとけだものの毛をよったものや、草や木の強いすじを使ったことでしょう。つりでは、深い所にいる魚や、沖の方にいる魚もとることができます。しかし沖でつるには、舟を出さなければなりま



せん。だから二人か三人が組になって、魚をとりにいくようになってきます。それとともに魚のとりかたもだんだんくふうをつんできて、ざるや網をつくったり、やなを川にしかけておいて魚をとったり、つぼを海の中においてたこをとったりするようになります。これはおもしろいばかりでなく、手かずがかからないので便利です。「なわ」といって、なわにつりばりをたくさんしかけておいて魚をとるのも、つりの進歩したものです。網にも四ツ手網のようなものから、じびき網やだいぼう網、そこびき網のような、さまざまのものがあらわれてきました。魚の習性とか、およいでいる場所とか、いろいろなことを考えにいれて、しだいに網の種類も、網によるとりかたも進歩していきました。

いわしは、この地方ばかりではなく、日本じゅうどこでもたくさんとれる魚ですが、これはたいてい網でとります。じびき網などは、二百メートル以上もある大きなものもありますから、漁師がめいめいでもっているわけにはいきません。だから、部落や村の人たちが共同でもっていたり、網元といわれる人たちがもっていて、おのおの漁師がそ

の網元に属しています。ほかの魚をとる大きな網でも同じことです。こんな大きな網をしかけたり、それで魚をとったりするにはみんながほんとうに助けあわなければなりません。また魚は、いつでもうまくとれるとはかぎりませんから、えものを分けあったりすることも、おたがいのためにぜひ必要なことです。じびき網を引くときには、船の人だけではなく、浜べにいる人がみんな出て手つだいます。また魚見(うおみ)といって、ふだんいわしが沿岸(えんがん)によせてくるのをみつける役目の人もいなくてはなりません。



漁船をつくったり、いらない時に浜べにあげて手入れしたりすることも、みんなが力をあわせてやらねばならない仕事です。もちろん大昔の船は材木を組みあわせたいかだでした。またかんたんな丸木(まるき)船でした。しかし道具の十分にないその時代では、そのような丸木船をつくるのも容易(ようい)なことではなかったでしょう。木をきりたおして枝



をはらい、皮をむき、けずったり、くりぬいたりするのは、とても一人ではうまくいきません。だから、みんなが力をあわせて働きます。したがってその船も、はじめはみんなのものだったのです。いまでも部落や漁業組合で船をもっている所があるのは、そのころのふうが残っているのだと考えられます。

そのうちに船もだんだん進歩して、板と板をじょうずにあわせてつくるようになり、一方では船を自分でもつ人もできてきました。船をもっている人は、船をもたないなかまをたのんで、いっしょに魚をとりにいき、とれた魚を分けあいます。今でも船の分けまえをとって、あとをみんなで頭分けにする所がたくさんありますが、こんな分けかたも、みんなが五分五分(ごぶごぶ)のたてまえで力をあわせていた昔のやりかたのなごりでしょう。船をもっている人がだんだんお金持になり、みんなの頭かぶになると、はじめから人をやとっておいて、船のせわや、漁の手つだいをしてもらうようなことも起ってきます。

船のほかに、網がだいじな道具となる場合にも、おなじようなことが見られます。船も網もみんなのものであれば、とったものはみなで頭わりにし、船の手入れも世話も、

網をほしたりつくろったりすることも、漁のときのいろいろな仕事も、みんなが力をあわせてやります。ところが船や網がだれかの持物となると、その人たちは、他の人よりよけいの分けまえをもらったり、他の人をやとって働いてもらったりするようになります。こうなるとかなりこみいってきますが、それでも、おたがいが助けあってくらしを立てていくということにはかわりありません。

魚がたくさんいてえものの多いうちは、だれがどこで魚をとってもかまわなかったのですが、魚が少なくなってきたり、また魚のとれる場所がはっきりわかってくると、漁場というものに対して、これを使う権利をやかましくいうようになりました。この村は海のそばにありながら、漁業で生活している家は一つもないでしょう。浜にきて魚をとる人たちは、みなとなりの町の漁師です。これはこの村の浜の漁業権を、町の漁業組合がもっているからです。この漁業権は、村や町や、あるいは組合がもっていることもあり、会社や網元といわれる個人のもっている場合もあります。漁業権も、もともとは、その漁場で漁をする人たちの共同のものであり、その人たちの生活を守り、他の人たち



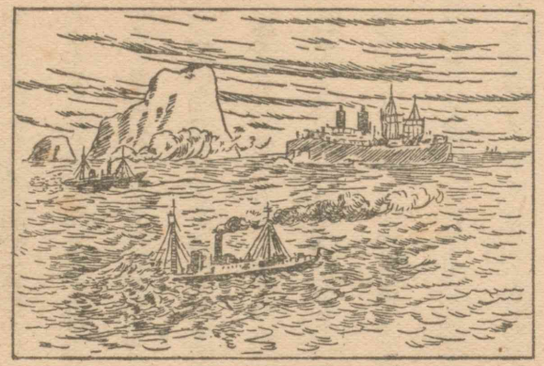
とむやみに争わないためのものであったのです。

漁場のことをやかましくいうと、とれる魚の量にもきりがありますから、元氣のある人たちは、もっと廣い自由な海に出ていって魚をとろうとします。またそればかりでなく、いろいろな原因で漁業のきぼが大きくなり、船も発達してくると、自然遠く出ていくことになります。しかしそのためには、食物や水をつんでいったり、とれた魚をいれてくる場所があるような大きな船ができなければなりません。そこでだんだん大きな船がつくられ、帆を使ったり、大きなろを使ったりして、遠くの海に出かけるようになりました。勇敢な人々が十人十五人と組をつくり、ときにはいく組かの船がつれだってかつおやまぐろをおいかけます。このような漁のやりかたが遠洋漁業とよばれています。この附近の漁師たちも、かなり昔から遠く金華山沖や八丈島の方まで出かけています。現在では発動機船ができましたから、ますます遠くまで出かけることができます。もっとも戦争からこのかた、油が十分に手にはいらなくなったのと、発動機船もへったのとで、だいぶおとろえました。しかし、まただんだんとさかんになってくることでしょう。

このような遠洋漁業は、今も昔も大きな冒険です。どうして冒険なのかわかりますか。第一に、昔は、大きいとはいっても多くは木造の漁船で、ラジオもなしに、十人内外のものが廣い海に出ていったのですから、いつしけにあって船がひっくりかえるかわからないし、どこまで流されてしまうかもわからなかったのです。今では小さな船でも、羅針盤はもとより、ラジオさえありますし、少し大きくなれば無線電信の裝置をもっていて、近くの船や陸上とれんらくし、天氣ぐあいを知ったり、位置を知ったり、危険を知らせたりできます。したがって、昔とくらべればはるかに安全になりましたが、それでも機械が故障したり、天氣の急な変化にであったりして、これをさけられないこともあるので、やはり冒険であることはかわりません。しかし遠洋漁業が冒険だというわけは、もう一つあります。それは、そんなに苦労してはるばる出かけていっても、必ずしも思うように魚がとれないことがあるのです。もちろん、ときには不漁の場合があるのは当然ですが、遠洋漁業では漁が大じかけですから、そのあたりはずれはきわめて大きなえいきょうをあたえるわけです。これも漁業に関する知識が増し、技術が進歩する



につれて、だんだん不漁の場合をさけることができるようにはなりましたが、やはり程度の差にしかすぎません。



船

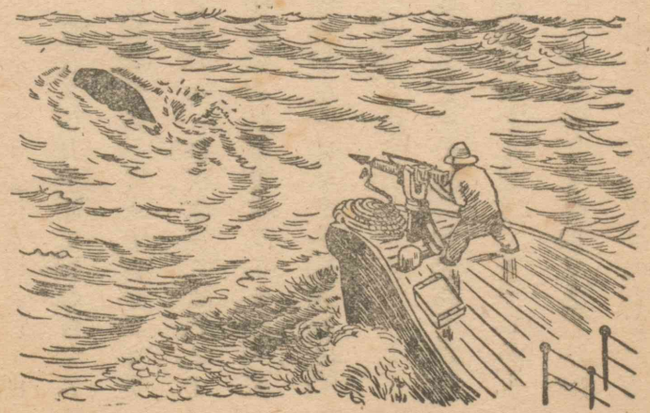
こういった冒険をしてまで遠洋漁業に従事する人たちは、とくにおたがいに助けあうことが強いのです。海上での災難を防ぐためには、乗組のものがほんとうに氣をそろえて、自分自分の仕事をするのが第一だからです。遠洋漁業に出かけている人たちの家族もたがいに助けあって生活します。

鯨捕

船主の家では、乗組の人たちの家族の食糧その他、入用のことについて親切にせわします。そういうしくみになっていればこそ、遠い海でも家のことは心配しないで十分働けるのです。遠洋漁業から帰ってきて、とれた魚を賣ってえたおかねもなかよく分けます。いくつかの船が組になっているときは、えものの多い船や少ない船が

あっても、おたがいに平均して收入を分けあうようにします。これも、助けあいの力で不漁の損害を少なくする方法です。みんなでえたおかねの一部を、共同の資金としてとっておく所もあります。こういった助けあいは船主や網元が中心になっているものが多かったのですが、近ごろはだんだんと組合が中心になってやるのも出てきました。

遠洋漁業がとくに大じかけになったものとしては、蟹工船や捕鯨船があります。これらは何百トン、何千トンという大きな汽船で、たくさんの乘組員をのせ、船内には漁獲物を処理する工場がついています。母船のほかに数隻または十数隻の子船をひきつれて、あるいは北洋にあるいは南極洋にまで出かけていきます。



漁業はわが國の重要な産業ですが、これからも十分に研究を重ねて、漁業に從事する



人たちがかたく助けあい、また他の職業の人たちともっと力をあわせるようにしていかなければ、こんごの大きな發達はのぞめません。たとえば石油が十分になければ、漁船の活動は思うようになりません。また、漁獲物の輸送や加工の方法をもっとくふうしなければ、新鮮な魚を國内に配給することも、輸出品としての干した魚類やかんづめのよい製品をつくることも、うまくいかなくなります。また昔からのしきたりにばかりたよっているふうをなおさなければ、漁業に從事する人たちのもつ相互扶助の美風もいきづまってしまいます。この村には漁業をいとなんでいる家がありませんが、しかし村の出身の人には、町にいって漁業に從事している人もあり、町の水産会社に資本を出している人もあります。きみたちのなかからも、將來この方面に進んで、水産日本のためにつくしてくれる人があることと思います。たとえ、だれもその方面に進まないとしても、きみたちが漁業に從事している人たちの仕事をほんとうによく理解し、その人たちのために、きみたちのできるだけのことをすれば、それで十分役立つことになるのです。

こんどきみたちが、この「さまざまの協力」という本をつくろうときめ、先生にも第

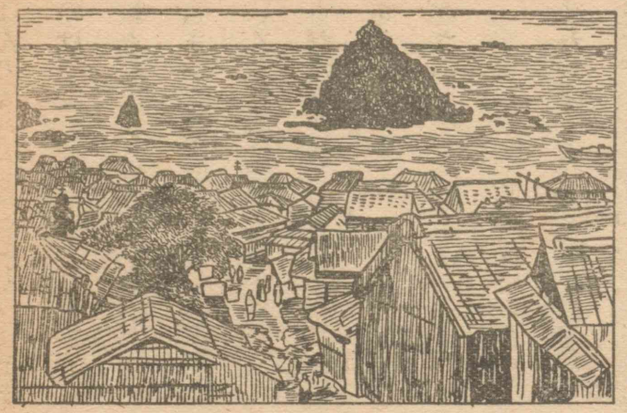
四ぱんの人たちといっしょに漁業に従事する人々の協力のことを書くように頼んでくれたのは、ほんとうにうれしいことでした。漁業とこれを中心とする漁村の生活についてはおもしろいことがあまりたくさんあって、どんなふうに書いたらよいか、先生も困ってしまいました。漁業の進歩したのは、名も知られない私たちの祖先の長い間のたゆまないくふうや発見のおかげであり、また人々の協力のたまものであることを十分に考えてください。そしてまた今後の漁業の進歩や、漁村の人々、ひいては私たち全体の生活の向上もまた、みんなのたゆまないくふうや発見と協力によるものであることを考えてください。

## 漁業部落の見学　　第四ぱん

私たちはこのあいだの日曜日、みんなで磯村へいきました。磯村はとなり町の漁業部落です。となり町のにぎやかな通りをすぎると橋があります。橋の上までくると石油の臭がぷんとしてきます。下手を見ると、発動機船が五、六ぱいとまっています。橋をわたってしばらくいくと、両がわの家のようすがかわってきて、とこ屋やふろ屋や飲食店



が、小さな家に入りまじっているのが目立ちます。川岸の方に漁業会の建物や倉庫があります。倉庫のむこうにいわしをにる小屋があり、そのそばにいわしがたくさんほしてありました。道がちょっとのぼりになった所の右がわにお寺があります。そこをすぎると、急にひろびろした太平洋が見えてきました。



漁業部落の風景

道も急にせまくなり、前よりももっと小さな草ぶきの家が、海岸までびっしりと立ちならんでいます。弁天島をはじめ、いくつもの島や岩が見えて、たいそうよい景色です。家はわりあい小さくて庭がありません。道のふちなどに少しえんどうやとうもろこしがうえてありますが、畑もほとんどありません。ひらいた魚が、あちらこちらにほしてあります。子どもたちは、みな砂浜に出て遊んでいました。もうおよいでいる子どもたちが何人も

いました。

男の人たちのすがたはあまり見かけることができません。年とった人が二、三人、砂浜で網をつくろっていました。女の人たちは、せんたくをしたり、炊事をしたり、いそでのりをとったりしていました。せんたくや炊事を、井戸ではなく、共同の水道でやっていたのには感心しました。

井上君とはる子さんとは、漁業会の事務所で、ぼくたちのもっていった質問に答えていただきました。あとのものは、あたりの景色や、部落の家や舟や網などの写生をしました。べんとうはみんなで海べでたべました。それから、いそで海草や貝を採集して帰りました。

## まぐろ延縄の話　第四ばん

漁業会の事務所で、かつを漁業の一例としてまぐろ延縄の話をききました。

まぐろにはビンナガ・キハダ・クロマグロ・メバチの四種があり、ふつうカジキもそのなかまにいれられています。まぐろ延縄には大縄・中縄・小縄の三種があり、大縄は



クロマグロ、中縄はキハダ・メバチ・ビンナガ、小縄はビンナガをとるのに用います。

クロマグロは、ただマグロともいい、二三十貫のものがふつうですが、大きいのは百貫もあるそうです。岸の近くでは、だいぼう網、落し網でもとりますが、將來重要なのは、遠洋漁業の中の延縄によるものです。

**延縄（大縄）の一鉢は、次のようなものからできています。**

みき縄＝なんきんあさの縄、直径二分五厘、長さ百六十尋。

えだ縄＝みき縄とほぼ同じもの、十五尋から二十尋のもの二本、四尋のもの四本、合計六本を、みき縄百六十尋の間につける。おのおののえだ縄には、麻のしんに綿糸を巻いたもの（長さ三尋）をつけ、それにまたはりがね（二十五番線）を九本よったもの（長さ一尋半）をつけてつりばりをつける。

つりばり＝直径一分五厘から一分八厘、長さ三寸五分から四寸二分の鉄でつくる。

うき＝直径三寸、長さ三尺ぐらいの桐丸太を、みき縄一鉢について二つつける。

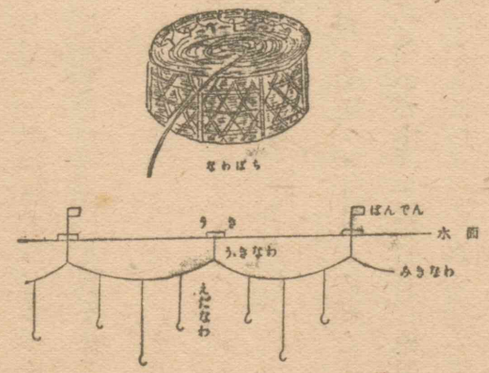
ぼんでん＝長さ十五尺ぐらいの竹の先に小旗をつけためじるしで、みき縄一鉢につき一本ずつ、うきにつけて水上にまっすぐ立てる。

縄鉢＝一鉢（百六十尋）ずつをいれておく竹のかごで、直径二尺高さ一尺ぐらいある。

延縄は、秋から翌年の春にかけて、西風のはげしい季節に使われます。だからその船もとくにじょうぶにつくり、百トンから百二十トンぐらいで、二百から二百五十馬力のデーゼル機関をすえつけたものが多く、延縄捲揚機、探照燈をそなえ、無線電信電話機、漁獲物貯蔵の設備などもあります。

漁船の基地では、いつでも、漁場の狀況や天候についての情報を集めています。そしていよいよ漁に出かけるときは、船や機関に故障がないかどうかをしらべ、漁具やえさや燃料、氷、食料、飲料水などをつみこんで、けんとうをつけた漁場にむかって、出発します。一航海は一月以上におよぶことがあります。

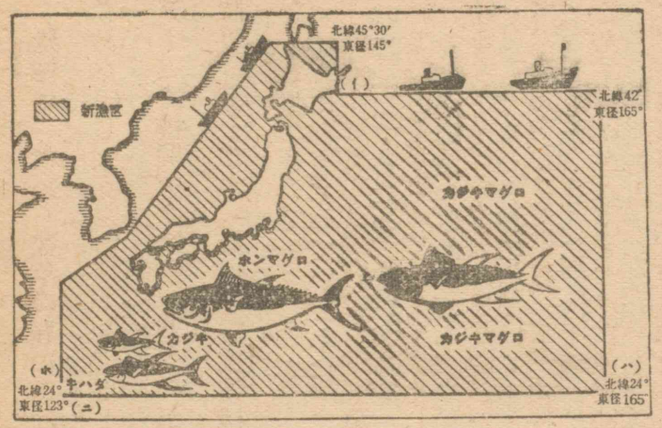
漁場が近くなると、見張りのものは少しのゆだんもなく海上をみはって、他の船の行



なわばちとはえなわ



動はもちろん、海鳥の集まりかた、潮流や水温などに注意します。そしてためしにはりをおろしてみたりして、魚群がいるかどうかをしらべながら航海していきます。いよいよ漁場に着きますと、船長の命令で乗組のものはそれぞれ持場につき、延縄にうきやぼんでんをつけ、船の速力をかげんしながら、縄を海に投げます。五、六十トンの船でも百鉢、百五、六十トンの船だと二百鉢から三百鉢をつないで投げこむので、縄の全長は二十海里以上になります。えさは、スルメイカ・ヤリイカ・ムロ・イワシなどです。このようにして、間を通るクロマグロをまちぶせるわけです。



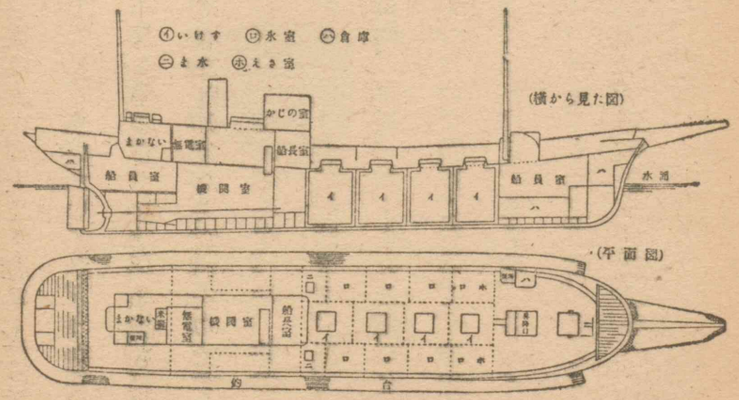
わが國の漁区とまぐろの漁場

縄を入れて適当な時間がたったら、縄の一方のはしから引きあげていき、鉢を整理し

ます。そして、とれた魚を処理して貯蔵し、次の行動にうつります。

マグロは日本人には親しみの深い魚ですが、沖に出てとるようになったのは明治以後です。それも明治の中ごろまでは、小さな和船で、しかも帆をかけて漁に出たので、せいぜい岸から二、三十海里、一航海二、三晝夜にかぎられていました。しかも冬の海のあらい時に漁をするため、遭難する船が多かったのです。

それが明治のおわりごろ、発動機のある漁船がふえてから、もっと沖に出ていくようになり、漁船の数もふえました。さらに航海や漁の技術が進歩し、船も改良され、延縄などが使われるようになり、また船内に冷蔵の設備ができたり、無線電信が利用されるように




まぐろの漁船



なってからは、いよいよ遠方に出るようになったのです。東は太平洋上二千海里、南は赤道以南まで出かけていったこともあります。ことに冷凍にしたり、かんづめにしたものが海外に輸出されるようになって、このまぐろの漁業は非常に発展しました。今後も、捕鯨やトロール漁業、かつお漁業などとならんで、さかんにしなければならないものです。

**次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょう。**

1、「さまざまの協力」の他の部分はどんなふうにできたか、考えてみること。
2、現代の農業はどんなにして発達してきたかをしらべること。
3、家畜のはたらきや飼いかたや、その歴史についてしらべること。
4、農業と鉱業や工業との関係についてしらべること。
5、農はん期の共同炊事やたく兒所のことをしらべること。
6、肥料その他の入用な品物の配給のみちすじをしらべること、昔と今との手に入れかたをくらべること。
7、衣食住について大昔と今とをくらべてみること。
8、現在の水産業はどんなにして発達してきたかをしらべること。

9、いろいろな製塩法をしらべてみること。
10、漁業部落を見学して、衣食住のすべてについて、農業部落とくらべてみて、なぜちがっているかを考えてみること。
11、さまざまの土地の利用のしかたをしらべてみること、裏作のことや漁村の茶園や土地の使いかたを考えてみること。
12、物の生産に関係して、交通がどんなに発達してきたかをしらべてみること。
13、町の商店をしらべ、賣る品物、店の位置、店の数などを地図にあらわすこと。



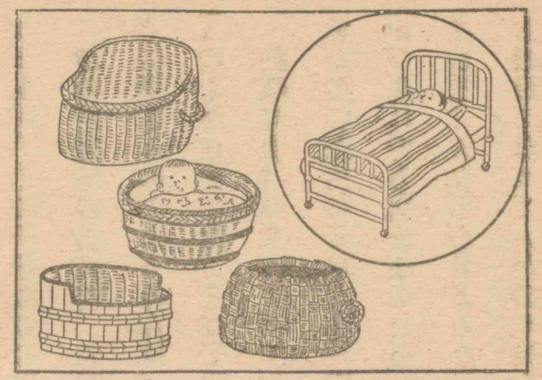
# 四、誕生日

きょうは、くに子さんのお誕生日です。三郎君はもちろん、進君、すみ子さん、はる子さんの新聞係の委員は、お祝いの夕食によばれました。

くに子さんのおとうさんは、くに子さんが三つのときに、またおかあさんも五つのときになくなりました。それに戰爭中はおにいさんが兵隊にいったので、ずいぶんさびしかったのです。小さいにいさんとふたりでるすをしていました。ちょうど東京におよめにいっていたおねえさんの一家が疎開してきて、いろいろせわをしてくださったのでしたが、それでもなかなかたいへんでした。しかし戰爭がおわって、おにいさんがお帰りになると、まもなくおよめさんがこられて新しいおねえさんができましたし、今まで人のおせわになっていた田や畑もまたうちの手にかえって、急ににぎやかになりました。

おにいさんは高等科しか出ていられませんが、酒もたばこものまれず、おとろえてしまった家運をとりかえそうといっしょうけんめいに働いていられます。おねえさんは町

の女学校を卒業されましたが、毎日まっ黒になってのら仕事をしていられます。去年赤ちゃんが生まれました。



ベッドとえづめ

おにいさんもおねえさんも、たいへん進んだ考えをもっていて、農家の生活を明かるくしようとつとめていられます。ひとつには、にいさんのるすちゅうさびしかった、くに子さんや小さいにいさんの心を、ひき立ててくださるおつもりもあるようです。

このへんでは、子どもの誕生祝いに、そのお友だちをよぶというようなことはありませんが、おねえさんたちのお考えで、新聞の係の人をよんでくださったのです。くに子さんが新聞の係になってから、たいそう元氣が出てきて、いつも夕飯のときなど、その話をするので、おにいさんたちもおねえさんも、興味をもってなにかとちえをかしてくださったりします。また新聞の



なかまの人たちのことなども、いろいろと話にきかれて、たいそうよろこんでいられるので、きょうもその人たちをよんでくださったわけです。もっとも三郎君は家が近いので、しじゅういききしています。

きょうは日曜なので、くに子さんは朝からおねえさんのお手つだいです。赤ちゃんは奥座敷のおにいさん手製のベッドにねていて、たいして手がかかりませんが、おねえさんのお料理はずいぶん念いりなので、朝からたいそういそがしいのです。

約束の五時になると、三郎君をはじめ、そろってやってきました。したくがまだできないので、女の子はみなでお手つだいです。座敷に食卓をならべたり、それをふいたり、かびんにダリアをさしたり、座ぶとんを出したり、かいぶしをたいたり、おねえさんのさしずどおりにやりました。くに子さんはお台所の方もお手つだいしています。三郎君と進君とは、えんがわに腰をかけて何か話しています。

にいさんと小さいにいさんが、早めにのらから帰ってこられました。みんなを見て、「おやおや、お客さんに働かせて。」と笑いながらあいさつなさいました。

食卓の用意ができたときには、おにいさんたちも、おふろをすませて出ていらっしゃいました。座敷に食卓を二つならべて、八人がぐるりとすわりました。まんなかのかびんには赤いダリアがさしてあって、見た目もにぎやかです。おいしそうな五目ごはんが、めいめいのおさらにきれいにもりあげてあります。すい物のおわんも、お魚のおさらも、ひとりひとりそろえてあります。新鮮なきゅうりとトマトは、二つの大ざらにもってあります。そのそばには黄いろいどろどろしたものがこばちにいれてあります。一同で、くに子さんにおめでとうをいいました。くに子さんも、うれしそうに、ありがとうございます、と答えました。

三郎君は五目ごはんからたべようと思って、すみ子さんの方を見ましたら、すみ子さんはおすい物のわんを取りあげたところです。ああ、そうそうと思って、三郎君もおすい物をいただきました。ねぎと小さなおだんごがはいっていました。なんとなくあま味があっておいしいおつゆでした。おだんごはちょっとかまぼこのような味がしました。三郎君が何でつくったのかしらと思っていますと、おねえさんが笑いながら、「三郎さ



ん、それ、何だか知っていて?」といわれたのでびっくりしました。いわしでつくったものだときいて、もう一度びっくりしました。三郎君は、いわしというものはあまりおいしくない、とばかり思っていたからです。「ええ、いわしですか。」というと、三郎君がいわしをあまりすかないことを知っているおねえさんは、「その焼きたてのいわしをたべてみてくださいよ。」といわれました。頭も骨もとって、身をひらいてつけ焼きにしたそのいわしは、おいしそうな香がしています。一つとってたべると、かば焼きのような味がしてたいへんおいしいのです。めざしやだいこんとにつけたいわしになれていた三郎君は、いわしのおいしさを知るよいおりにぶつかったわけです。おねえさんは、「そのいわしはけさ町から賣りにきたのを買ったのですが、あとはみんな家でつくったものや、前からとっておいたものだけですよ。ああ、そうそう、三郎さんのうちからいただいたものや、配給のものもありますが。」といわれました。五目ごはんには、にんじん・ごぼう・いんげんのほかに、いもがらや、しいたけがはいっていて、のりがかけてありました。おにいさんは、「なかなかよくできたじゃないか。」と笑いながら、たべて

いられます。「三郎君たちおかわりをしなさいよ。」といってくださいましたので、三郎君と進君は、五目ごはんを軽くかえてもらいました。すみ子さんたちは、もう野菜をいただいています。五目ごはんのおさらに、トマトやきゅうりをのせて、黄いろいものをかけておいしそうにたべています。三郎君は先ほどから、その黄いろいものが何だかふしぎでしかたがないのです。はる子さんもめずらしいような顔をしています。三郎君もトマトやきゅうりはたべつけていますが、その黄いろいものだけは見なれません。ちょっとたべてみると、野菜サラダと同じような、すばらしくおいしい味がします。うかがうと、家の落花生でつくった落花生油や、卵の黄味や、酢からできているマヨネーズというものだそうです。トマトやきゅうりも、いつもとちがった味がして、たいへんおいしくいただきました。

だれもがきれいにごちそうをたべてしまったので、あとかたづけも手がるです。食器類はたちまちのうちにさげてしまいました。そしてお茶をいただきながら、おねえさんたちと話しました。おねえさんは赤ちゃんにお乳をのませながら、きょうのお料理の話



をしてくださいました。にいさんふたりは台所で話しながら、火をもしていられます。

姉「くにちゃんのお誕生日は、ずいぶんいい時ね、畑にはいろいろな野菜があるし、海でもいろんな魚がとれるから、お料理をつくるのもらくだわ。」

くに子「でもきょうは、おねえさん、たいへんだったでしょう。」

姉「いいえ、いそがしいだけで、材料に苦労しないからたいそうらくなのよ。」

はる子「あんなにいろいろのものが使ってあったけれど、みんなとっておいたのですか。」

姉「家では、ふだん、材料をあまり使わずに、物日やみんなの誕生日や、お客様のいらっしゃった時の用意にとっておくのですよ。」

進「だれの誕生日がいちばんわるいでしょうか。」

姉「さあ、材料にいちばん困るのは、四月ごろかもしれませんね。いけておいただいこんやにんじんやごぼうももうなくなっていますし、お葉類も花が咲いてしまうし、春まいたものはまだ使えないし、お魚でも配給されなかったらほんとうにしかたがありません。どこの家でも、そういう時のために、干し魚や、つけ物や、切りぼしや、こ

んぶや、いろいろの食糧を貯藏しておきます。だから、そういう時のごちそうは、今ごろのとはよほどようすがちがいます。」

すみ子「東京などでは、このごろでも、なかなか野菜や魚が手にはいらなくて困るそうです。それでどの家でも、貯藏できる食物はなるべく少しずつ使ってながくもたせるようにしている、とおとうさんがいっていました。」

姉「ほんとにねえ。ここの東京のおねえさんなども、ずいぶん苦労していらっしゃるようです。輸送や配給が思うようにいかないからですが、困ったことです。それを思うと、このへんはまったくありがたいことです。」

進「船でも野菜や魚には、ずいぶん不自由するといいます。」

三郎「しかし、大きな船には冷藏庫があって、たくさんの野菜や魚や肉を積みこんでいる上に、かんづめを使うので、なかなかごちそうがつくれるという話だよ。」

すみ子「船ではどうしてもたいくつするので、旅客をなぐさめるためによいごちそうをつくるのだときいたことがあります。」



姉「いなかの生活もうっかりすると変化にとぼしくなって、樂しみが少なくなりますから、みんなでくふうをしあってごちそうをつくったり、それを近所に分けたりするのは、たいせつなことだと思います。しかしいなかの生活は非常にいそがしくて、なかなかお料理をつくるひまがないのがふつうです。だから家じゅうのものが力をあわせて、ひまをつくることがだいじなのです。」

すみ子「おとうさんのお話では、いなかの人たちは、食事の量が多いわりに種類にくふうが少ないので、子どもなども案外に抵抗力が弱いことがあるということです。それでもこの村などは海岸に近いために、しぜん、魚をたべることが多いのでよいそうです。ただ時々、肉はすきでも魚はきらいという子があったり、病氣になっても牛乳をのまない子があったりするのは、困ったことだといっていました。」

姉「だから、いなかではお料理にくふうをすることがたいせつなのです。それといっしょに、みんながなるべくすききらいをいわないで、じょうになる食物を研究してたべることが必要なのです。しかし、昔とくらべるとたいへん進歩してきたものです。疎

開してきた町の人たちから、教えていただいたことも多いと思います。」

進「さっきいわれたひまをつくるのには、どうすればよいのでしょうか。家のおかあさんなど、朝から晩まで、せわしくてしかたがないといっています。」

姉「上田さんのお家は、人数が多いし、お家も廣いから、食事のことでも、せんたくでもそうじでも、ずいぶんたいへんなのですね。ましてお年寄もいらっしゃいますから、いろいろ御用事が多くなるでしょう。上田さんが、おそうじをしてあげたり、着物をよごしたりやぶったりしないようにすれば、それだけおかあさんの手があくわけでしょう。上田さんのおねえさんも、妹さんも、弟さんも、みんながそろってそういうふうにすれば、おかあさんが時にはごちそうをおつくりになるひまもできるというものです。しかし私たちの生活にひまをつくるのは、なかなかの大事業です。おや、おにいさんが呼んでいらっしゃいますから……」

おねえさんとかわって、ふたりのおにいさんが話のなかまにおはいりになりました。

兄「みんな、なかなかおもしろそうな話をしていたね。ひまをつくってどうしようとい



うのかい。」

進「おかあさんにごちそうをつくってもらうのです。」

兄「ハハ、それもいいね。だが、ひまの入用なわけはほかにもあるよ。」

はる子「お裁縫をしたり、ラジオをきいたり……」

兄「そう、そういうこともあるね。ひまはまずく使うと、人間をだめにしてしまうが、また仕事にばかり追われていてひまをつくらないでいると、自分のしてきたことを考えてみたり、これからの計画を立てたりすることができないばかりか、だんだんと考えのせまい、かたよった人間になってしまうだろう。そして自分の家や自分の村、ひいては自分たちの國や世の中をよくしていくくふうや仕事もできなくなってしまうのだ。ではひまをつくるためのくふうはというと、ずいぶんたくさんあるよ。にいさんのような百姓仕事でも、第一に計画をきちんと立てること、そして仕事におくれないこと、第二に仕事のやりかたをくふうすること、ことに農具や農業機械、それに家畜の力をうまく利用すること、第三に家じゅうのものが心をあわせて働くこと、第四に

は組合から肥料をもらったり、生産した物を送り出したりする仕事がすらすらといくことなど、どれもみなたいせつだ。おねえさんの仕事にしても、一日じゅうの仕事がくるいなくはかどること、家じゅうのものが氣をそろえて、いっしょに起きたり、食事をしたり、そうじをしたり、入浴したりすること、食糧その他の配給が規則的にすらすらはこぶことが非常にたいせつなのだ。しかしこのごろでは、配給はなかなか手数がかかるし、女の仕事は天氣やお客様のつごうでくるうことが多いので、むやみにいそがしくなってくる。家ではみながみな氣をそろえてくらすことができるので、その点はいいが、それでも赤ちゃんのことがはいってきただけ、ねえさんのひまが少なくなってきている。ましてふつうの家では、年よりや子ども、学校にいく生徒たちのつごうで御飯が二度になったり、そうじが一度にやれなかったりするので、家などとは比較にならないほど仕事のてまがかかっている。だから、今いったようなことに氣をくばるほかに、仕事のしかたにいろいろなくふうをすることや、家の設備を能率的にする必要が大いにあるのだ。すみ子さんのお家など、りっぱなお手本だと思ってい



る。家でも台所の窓を大きくしたり、水がめの場所をかえたり、流しを廣くしたり、かまどを土間からあげて流しに近くしたりして、勝手仕事も明かるく衛生的で、能率のあがるようにくふうをしているわけだ。赤ん坊をあんな妙なベッドに入れておくのも、一つはなるべく手のかからない子どもに育てるためだが、また一つには衛生を考えた点もあるのだよ。

ぼくたちの祖先も、たしかにいろいろとくふうをしてきている。たとえば、お祭や物日のきめかた、その時のごちそう、季節季節の料理、村のいろいろなしきたり、火災や不時の災難の予防法、家の構造や屋敷のかまえ、また赤ん坊の育てかたなどに生活によくあう苦心がはらわれている。しかし時代が進むにつれて、いなかの生活も昔とはずっとかわってきて、昔の人のくふうもはじめの精神が失われ、ただ古い習慣となってしまったものが少なくない。迷信や偏見とむすびついて、かえって害をおよぼしているようなものさえある。とくにわるい方の例ではないが、家のへやの使いかたでも客間をいちばんよい所にして、一家のものがね起きする所は日のあたらないへや

にしてみたり、土地によっては畫間もね床をしきはなしの所があったり、保健とか衛生の面からいうとずいぶん無考えのことがある。昔からのよい風習はどんどんこわれていくのに、かえって悪いしきたりがはばをきかせていることが多いのだ。

村の生活をもっと明かるい力強いものにしていくということは、なかなか容易ではない。今いったような、昔からのしきたりの勢力が強い上に、土地の自然のもっている力もなかなか強い。土地の産物や産業は自然との関係であまりかわっていかないから、生活も思うように進歩していかないということになりがちだ。寒い地方とか、山の地方とかでは、とくにそういうことがいえると思う。この村などは自然にめぐまれているといっていいのだが、それでも東京との交通は不便なほうだし、水道や電氣などは、よほどくふうしなければうまくいかない。むずかしいからぎりぎりまで見あわせておこうということになってしまう。となりの磯村には水道があるのに、この村にないのは、きみたちもふしぎに思ったことだろう。」

おにいさんはなかなか話に熱がはいって、それからそれへと話しつづけられました



が、さすがに新聞の係だけあって、みんないっしょうけんめいにきき入っていました。この時おねえさんが台所から出てきて、おにいさんをよばれたので、しばらく話がとぎれました。

まもなくおにいさんたちは、大きなおさらにおまんじゅうを山のようにもりあげてはこんでいらっしゃいました。

姉「これは、おにいさんがみなさんにごちそうしようというので、きのうの朝から用意してつくったシナまんじゅうです。なかには何もはいっていませんから、このクリームをつけておあがりなさい。こちらの野菜といっしょにたべてもおいしいかもしれませんよ。」

はる子さんは、このおまんじゅうがふつうのおまんじゅうやパンとちがって、たいそうふんわりとできているのをふしぎに思いました。クリームはあまくておいしいし、たまなと青じその塩もみも、あっさりしておいしいので、たくさんいただきました。

兄「これは、つくるのに少してまがかかるけれども、なかなかかわっているだろう。に

いさんが中國の人からならってきたんだよ。じゅうそうがほんの少しいるだけで、ふくらし粉やじゅうそうでふくらませたんじゃないよ。たくさんたべてもらおうと思って、このとおりどっさりつくったから、えんりょなくおあがり。」

はる子さんやすみ子さんは、おねえさんからこのおまんじゅうやクリームのつくりかたを教えていただきました。

それからあとはみんなでいろいろな遊びをして、おいとましたのは九時近くでした。ちょうど明かるい月がのぼってきて、白い砂の上にくっきりとまつの影がうつって、美しい夜でした。

**次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょう。**

1、農家で客をよぶのはどんなときかしらべてみること。
2、みんなの誕生日のお祝いのしかたをくらべてみること。
3、学級で誕生会をもよおすこと。
4、來客用のふとんや道具類をしらべ、その扱いかた、保存のしかたをしらべること。



5、必要な栄養素をしらべ、こんだて表をつくってみること。
6、あるきまった日につくる特別の食物について、一年じゅうの表をつくってみること。
7、さまざまの食物の貯藏法と、その発達の歴史をしらべてみること。
8、自分の家を住みよいものにするくふうを考えてみること。
9、自分たちの生活のしきたりで不便だと思うこと、わるいと思うことを、他の人と話しあってたしかめること。
10、自分の住んでいる土地の自然が、どのくらい自分たちの衣食住にえいきょうをあたえているか、考えてみること。
11、ひまをつくることについてくふうをすること。
12、家の人たちにひまをつくってあげるように努力し、それがどんなふうに家の人たちの役に立つかしらべてみること。
13、みんなでいっしょにできる遊びをくふうすること。

# 五、夏休みの計画

七月になって急にあつくなりました。お祭りや遠足、田うえなど、楽しみの多かった一学期もそろそろおわりです。松林のむこうから吹いてくる海風が、なんとなく楽しい心をさそうような氣がします。十日からは、午後の授業がなくなりました。きのうの午後、三郎君の学級では、夏休みちゅうの生活を中心にして自治会がひらかれ、次のようなことがきまりました。

一、できるだけ家の手つだいをすること。
　去年とくらべて、たしかによけい手つだったと思えるくらい手つだうこと。
二、水およぎは必ず二、三人いっしょに、危険のない場所をえらんですること。
三、毎朝、涼しいうちに自分のすきな勉強をすること。
四、学級の農園の手入れは、各はん交代ですること。
五、自分の家の役に立つような道具や設備をつくること。（家の人から頼まれないものでも、役に立つものを考える。）



六、自分の家の職業についてくわしくしらべること。
七、村の問題について、考えをまとめておくこと。
八、旅行をする人は、なるべく写生をしたり、絵はがきや標本を集めたりしてくること。

六番と七番については、だいぶ意見が出たのでしたが、学期のはじめにきめた学級の標語に照らして、できるだけやった結果をまとめ、本にしてみようということになりました。農業をやっている家が多いので、その家の人たちは、自分の家の特別な作物や副業についてしらべてもよいこと、また何人か組んでやってもよいことにきまりました。七番は六番を研究した結果、必要を感じた人たちだけでよいことになり、五番の結果は学級新聞に発表することになりました。学級新聞は十日ごとに発行する予定です。

進君の家は、部落の中でもいちばん手びろく農業をやっていて、米も麦もさつまいもも野菜もつくっていますが、それらはどれも他の家と同じなので、進君は種まゆの製造のことをしらべることにしました。進君の家では長野縣の会社ととりきめをして、春、種まゆをつくるのです。村にはほかにも種まゆをつくる家がありますが、みな進君の家

でまとめて世話をしているのです。

養蚕はわが國の將來のためにきわめて重要な産業です。戰爭中、アメリカではナイロンという人造せんいができて絹の競爭相手になり、現在でもくつ下などでは絹の方がおされているそうですが、食糧や石油、木材等の見返り物資として、生糸や絹はいちばんだいじなものです。その生糸の原料となるまゆは、全國各地の農家でつくられています。養蚕はわが國の農家でもっとも廣く行われているだいじな副業です。ことに山の地方では、副業というより、むしろ主要な仕事になっています。賣るほど米や麦がとれる農家や、畑作物を賣って金にかえることのできる農家はよいのですが、自分の家でたべるだけの穀類や野菜しかつくる土地をもたないわが國の多くの農家、ことに山の地方の農家では、養蚕とか炭焼きとかはたいせつな現金のはいる道になります。戰爭以來ようすがかわってきましたが、現金をとるためには、養蚕や炭焼きなどの副業にたよるほかのない家も多かったのです。そのうちでも養蚕は、わが國では昔から、どうしても農家と切りはなせないものでした。



よい生糸を多くとるには、よい蚕の種をえらぶことが第一です。だからその種紙をつくるのは非常にたいせつな仕事です。研究が進むにつれて、種をとる蚕は、まゆをとる蚕とは別にして、特別に飼った方がよいことがわかり、そのためとくにそれに適した土地をえらんでやるようになりました。進君のおとうさんは、このあたりの氣候が溫暖なのと、村に山くわの豊富なこと、きょうそなどという蚕の敵の少ないことなどを考えた上で、長野縣の会社と相談して、十数年前からこの種まゆの製造をこころみられたのです。はたして進君のおとうさんのお考え通り、よい種まゆがとれるので、現在では縣下はもちろんのこと、長野・群馬、その他の養蚕地方から頼まれて種まゆをつくるようになりました。進君はおとうさんにきいて、このことをくわしくしらべようと思いました。

はる子さんは養鶏のことを、すみ子さんはお医者のことを、くに子さんは、野菜の促成さいばいのことをしらべるそうです。三郎君も乳牛飼育の副業のことを研究するといっています。

進君の手つだいは、畑の草とりです。ことしはおとうさんをびっくりさせようと意氣

ごんでいます。三郎君は毎日の牛乳運ばんのほかに、牛にやる草刈りをするつもりです。もちろん畑の草とりもします。はる子さんも進君と同じですが、台所のお手つだいもしたいといっています。すみ子さんは進君を手つだって、草とりをするそうです。くに子さんは草とりもしますが、赤ちゃんの着物をぬわしてもらえると樂しみにしています。それから、せんたくも手つだうといっています。

村の問題については、三郎君と進君は相談の結果、まず上の山のにいさんの所へいって、話をきくことにしました。上の山のにいさんは、町の銀行に勤めていられるので、三郎君からつごうをきいておたずねすることにしました。

夏休みにはいってさいしょの土曜日の午后です。三郎君と進君とは、上の山のにいさんの家をおたずねしました。にいさんは銀行から帰って、ひといき入れられたところでした。

兄「村の問題をしらべるって、どういうわけなのかい。」



三郎「ぼくたちは、この夏休みに、自分の家の職業がどのくらい村や世の中の人の役に立っているか、またどんなに村の人々や他の職業の人たちのおかげを受けているか、それからぼくたちは家の職業にどんな手つだいができるか、ということを研究しようときめたのです。しかし、村の役に立つということは、すぐわかるようでいて、考えるとはっきりしないのです。先生は、これには村の問題ということを考えてみる必要があるといわれましたが、きょうはその村の問題ということをうかがいたいのです。」

兄「ほう、なかなかえらいことを勉強するんだね。じゃあきくが、きみたちの知っている村の問題といったら、どんなものがあるのかい。」

三郎「それがぼくたちにははっきりとわからないのですが、村から、はいやかやのみを追いはらうことなども問題ではないのですか。また疎開の人たちや非農家の人に野菜などを配給してあげることや、戰災者や引揚者を助けてあげることも問題ではないのですか。食糧の供出とか肥料やじかたびなどの配給も問題なのでしょう。」

兄「なんだ、なかなかよく知っているではないか。それはみんな村の重要な問題だよ。

つまり、村の人たち全部が、なかよく助けあって、少しでもよい生活のできるようにしていきたいと思うとき、そのじゃまになること、たとえば、はいやかがいて傳染病をひろげるとか、農家では不自由しないばかりか、遠くの土地まで野菜を賣り出したりするのに、非農家や疎開の人たちが野菜に困るとか、供出のわりあてが公平にいかないとか、非常に困っている家にじかたびがあたらないとか、そういった困ったことがらをどう解決すればいいかというところに、村の問題があるというわけだ。」

進「小作の人たちに土地を分ける問題や、村に工場をつくる問題、副業をさかんにする問題などもあるようにきいていますが……」

兄「そうだ。それらの問題は、困ったことがらを解決するためというよりは一歩進んで、村全体がなかよくして少しでもみんなの生活をよくしていくために、こうしたらどうかと考えるときにおこってくる問題なのだ。たとえば、なるべく小作の人を自作にかえることとか、食料品に加工する工場や、その他の工場をつくって新しい産業をおこすこととか、副業として養蚕をさかんにしたり、にわとりとかぶたとか乳牛とかを飼



うこととか、そういうのぞましいことをじっさいにやるためにはどうすればいいかということもまた、村のたいせつな問題になってくる。」

三郎「つまり、村全体の生活をよくするのにさまたげとなっていることをとりのぞいたり、つごうのよいことをはじめていこうとしたりするところに、村の問題があるわけなのですね。」

兄「そうだ。だから、きみたちが家業のことをしらべていって、村としてはこうでないと困るとか、こうした方がいいとか、そんなふうに考えることにつきあたれば、そこに村の問題が出てくることになる。たとえば、三郎君が乳牛を飼う仕事を研究していって、乳牛を飼っている家には、飼料となるふすまや塩をもっと配給してもらわないと、村では乳牛を飼えなくなってしまいそうだということがわかったとする。そうすると、牛の飼料や塩の配給ということが、村の問題の一つになってくるわけだ。少しむずかしくなるかもしれないが、さっき進君のいった副業の話でも同じことだ。今は農村は景氣がいいけれども、これはそういつまでもつづかないかもしれないし、また

現在のように臨時の仕事があって、人手がそちらへまわっているということも、長つづきするとはかぎらない。そうすると、どうしても將來のことを考えた上で、よく土地にあった確実な副業をはじめておく必要がある。村としては、そこにもたいせつな問題が出てきているわけだ。」

進「そうすると、はいやかをなくすことは、それほど大きな問題ではないのですか。」

兄「そうだね。ちょっと考えると大きな問題ではないようにみえるかもしれないが、なかなかそうじゃないんだよ。村全体の人が結びあって、もっとよい生活をしていこうとすると、今いった職業とか経済とかの問題がまず第一に考えられはするが、みんなが健康で樂しい生活をするということも、やはり同じようにたいせつなのだ。むしろこの方が手っとり早い問題かもしれない。はいやかを飼っておいたって、別に何のたしにもならないのだからね。はいのために傳染病がはやって、おたがいにむだな費用を使ったり、いのちをうばわれたり、またかのために毎晩苦しい思いをしたりするのは、あまりほめた話ではないね。それも、はいやかはどうしてもなくせないというな



らとにかく、みんなで心をあわせて骨を折れば、十分たいじできるのだからね。」

三郎「そのほかには、どんな問題があるでしょうか。」

兄「それは、君たちがみつけるのがいいと思うが、たとえば、村の人たちの職業や経済にすぐにむすびついてくるものには、組合でトラックを買いいれる問題がある。村でできる草花や、そら豆、促成野菜を東京方面に送り出すのに、いちいちとなり町の運送業者にたのんだり、鉄道を使ったりしていたのでは、おそくもなるし利益もへるからだ。こういった運輸や交通通信に関係した問題はまだほかにもあるだろう。また六・三・三制の実施にともなって、小学校や中学校の校舎をどうするかというような教育の問題もある。君たちが勉強するのに学校にもっと本があったらいいと思い、それを先生がたにおねがいすれば、それも村の問題になってくるわけだ。小さい子どもたちだって村民の一人なんだからね。」

三郎「村の問題って、ぼくたちにもすぐ関係があるものもあるのですね。」

兄「そうだ。君たちが、もしわるい遊びにふけったりすれば、それも村の問題になって

くるわけだ。村の人たちの考えかたを、もっと深みのあるものにすることとか、みんなに人間のほんとうの楽しみを味わわせることとかも大きな問題だ。進君のおとうさんのおっしゃるように、村の人一人一人の収入が増したといっても、それがつまらない楽しみのためにむだに使われてしまってはなんにもならない。ましてくらしがらくになったということが、人にしんせつをつくすゆとりをつくるどころか、損得のことばかりを考えようとするきっかけになってしまうのでは、かえってなさけない。青年会でやっているいろいろな仕事も、この問題に関係しているものが多い。」

進「村の問題は、ずいぶんたくさんあるわけですね。」

兄「そして、そういった問題は、どれも、君たちのしらべようとする家業のことと、すぐ結びついているのだ。衛生のこととか、教育のこととか、楽しみを味わうこととか、人々の考えかたのこととかだって、みなそうなのだ。

もともと職業というものが、生活とは切っても切れないものだ。健全な生活ができなければ、どんな職業だってりっぱにやりとおすことはできない。それに職業のうち



には、お医者さんとか役場の人とか先生がたとかのように、保健衛生や人々の心がけのことに直接かかわりのあるものもある。杉山君などは、ああして朝から晩まで、人からなんとかいわれるくらい、農業にせいを出して働いているけれど、金をためるのを目的にしているのではない。明かるい農家の生活を自分たちできずいてみようという強い熱意でいっぱいなんだ。つまらない交際におかねは使わないけれど、よい本はどんどん買って読むし、青年会の費用などはずいぶん出しているんだ。いつもひまをおしんでいるようにみえるが、あれでゆっくりする時には、また思いきって楽しそうに時間を使っている。ぼくは、そのうちきっと、ああいう生活のしかたにみんながひきつけられるようになると思っている。」

三郎「このあいだくに子さんの誕生祝いに、ぼくたちもおにいさんからおまんじゅうをごちそうになりました。」

兄「おお、そうか、それはおいしかったろう。誕生祝いにあつまるのはいいね。それでおもしろい話でもあったかい。」

進「農村の生活をよくしていくには、自然のいろいろな條件と、昔からのわるい風習とがじゃまをする。これにうちかつには、家じゅうのものが力をあわせることと、くふうをすることとが必要だ。というような話で、ひまの入用なこと、ひまのつくりかたなど、にいさんやねえさんとみんなで話しあいました。」

兄「それはよかった。じっさい、ぼくたちの生活のよいところはすぐくずれるくせに、わるいところはなかなかなおらないのだからね。ほんとうに心をあわせて、努力する必要があるんだ。」

進「くに子さんのおにいさんも、そういっていましたよ。」

三郎「それでは村のいろいろな問題は、どうしたらいちばんうまく解決できるのでしょう。たとえば、方々の家で乳牛の飼料や塩の配給を増してもらうには……」

兄「まずその飼料や塩のことをくわしくしらべるんだね。現在この村で使っている飼料ばかりでなく、昔使っていた飼料や、他の土地で使っている飼料についてもよくしらべ、いちばん適当なもの、どうしてもなくてはいけないものを考えて、その種類や分



量をはっきりさせる。そしてそれらのいちいちについて、手に入れかた、手にはいる分量などをしらべあげる。ことにぜひ配給を心配してもらわなければならないものについては、その生産地や配給のみちすじから、その値段とか品質にいたるまでくわしくしらべなければならない。そして、こういうふうにすれば手にはいるという目あてがついたら、だんだんにほかの人たちにもその話をしてきかせるのだ。そうすると、はじめの考えがいろいろとたしかめられ改められて、みんなの意見がまとまるようになる。そこまでいけばもうしめたものだ。それは部落の人たちの寄合いでも話にでるし、乳牛組合でも話しあわれ、さいごには、村会や村役場、農業協同組合とか、牛乳の集荷や販賣にあたっている組合や業者まで動かすようになってくる。もちろんそれまでにはいろいろな困難があって、そう急には飼料や塩が配給されるようにはならないかもしれないけれど、みんなの考えが正しく、それに力をあわせて努力しあえば、必ず問題は解決されるだろう。つまり正しい意見はしだいにみんなの意見となり、みんなの意見となれば、それはきまって実現されてくるというわけだ。もちろんそういう正し

い意見の生まれてくるまで、またみんなの意見が一致してくるまで、それが実現されるまでのすじみちは、問題によって一様ではない。それはやっぱり、きみたちが勉強するにつれてわかってくることだと思う。きみたちの学級で、村の道ぶしんを手つだおうとか、展覧会をやろうとか計画する場合でも、よく考えてみると、今いったようなすじみちがひとりでにできていると思う。村だって、学級だって、問題の出てきかたも、解決される方法もまったく同じなのだ。」

かなりこみいったお話でしたが、三郎君たちはいっしょうけんめいにきいたので、だいたいわかりました。おにいさんたちはさらに、次のようにいわれました。

兄「ここでひとつ、つけ加えたいことがある。たとえばきみたちの学級に、おとうさんが御病氣で困っている一人の友だちがあるとする。みんなはむろんなんとかして、そのお友だちを助けて元氣づけたいと思うだろう。そうなればもうりっぱな学級の問題だ。それと同じように、村でもある特別の家に、別にそれは貧乏で困っているというわけでなくてもいいのだが、とにかくある一けんの家やある一人のために、みんなで



何かしてあげたいということになると、やはりそれは村の問題になってくる。たとえば村に功労のあった村長さんにお礼を申しあげたいとか、戰災で困っている家を助けてあげたいとかいうことは、やはり村の問題と考えていい。そのわけは、ひとつみんなに考えておいてもらいたいね。要するに村の問題といっても、何か特別のものがあるように考える必要はないんだよ。村の人たち全部の生活がもっとよくなるように、牛がよく乳を出してくれるように、作物がよくみのるように、村に病人がでないようにと考えてみて、それにはどうしたらよいだろうかというのが村の問題というわけだ。

さあ、だいぶ涼しくなってきたから、畑をみまわりながら散歩してこよう。わからないことは、歩きながらたずねたまえ。」

三人は畑の方へ歩いていきました。畑にはトマトやきゅうりが今をさかりとなっていました。三郎君たちがていねいにお礼をいっておにいさんとお別れしたのは、それから三十分ぐらいあとでした。三郎君たちは、なんだか急に考えがひらけたような氣がしてきました。田や畑で働いている人たちや、作物や、通りすがりの家々のことが、そのま

ま村の問題なんだ、と思うと、たのもしいような、また心のひきしまるような氣がしてゆかいでした。

**次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょう。**

1、夏休みの計画を立てること。
2、養蚕のことをしらべてみること。
3、山の地方の産業についてしらべてみること。
4、とくに山の森林を中心とする産業についてしらべてみること。
5、生糸と人造せんいとの長短をくらべてみること。
6、夏休みの間の家事の手つだいのしかたをくふうすること。
7、農村・山村・漁村に分けて、そこで行われている副業をしらべてみること。
8、家業の種類や、他の職業との関係をしらべてみること。
9、村にある工場を見学して、原料のくる土地や製品を出す土地のことをしらべてみること。
10、傳染病の予防の施設をしらべてみること。
11、村の人たちの樂しみと、そのための施設をしらべてみること。
12、自分の村では今どんなことがいちばん問題になっているか、それはどんなにして解決されるかを考えてみること。
13、市町村の政治をする機関についてしらべること。



## 六、夕御飯のあと

八月もなかばを過ぎると、もう暑さも峠をこしたようです。進君の家では、あけはなした涼しい座敷で、樂しい夕御飯がはじまっています。夕日はまだえんがわのガラス戸にさして、ひさしの下にのぞいている空のうろこ雲が、もも色にそまって光っているのがたいそうきれいです。進君がからだをずらしてみますと、太陽は低い峰つづきの西の山にまだ半分かかっていました。進君は夏休みの少し前から、夕日がちょうどあの山に落ちてしまう時刻を、たんねんに書きつけています。少しずつ沈む位置がずれていくのや、しだいに日あしが短かくなっていくのがわかって興味があります。

にぎやかな食事がすみ、みんながお茶を飲みだすころになると、いつもラジオの英語会話がはじまります。この時間には、進君の家では一家そろって勉強をすることになっています。進君もはじめはとてもついていけないと思ったのでしたが、このごろになって、さいしょとくらべてみると、自分ながらそうとう進んだことがわかります。毎日毎

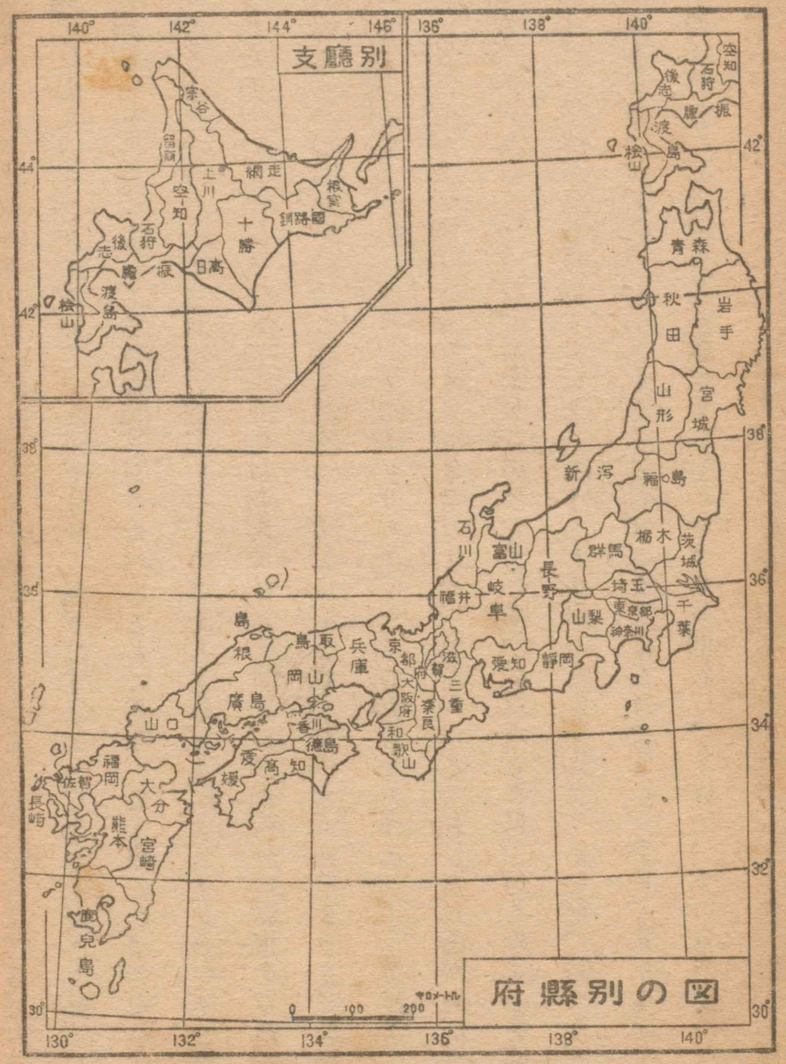
日かかさずきいていたのが役に立ったのでしょう。このへんではめったに外國の人にも会わず、残念ながらまだ実地にためす機会がありません。しかし進君にとっては、英語を使ってみることより、英語と日本語のちがいを考えてみることのほうに興味がありました。もちろん外國のことばをおぼえるのはたいせつなことです。けれども私たちのふだん使うことばについても、みんなで一度話しあってみるのがおもしろいではありませんか。ことばには通じるようで通じないところがあります。ときには、どうしたらいちばんよくわかってもらえるか、ということを考えながら話してみる必要があるでしょう。ラジオのできたことは、遠くはなれた人たちのことばや考えを、どんなに通じやすくしたことでしょうか。しらべてみますと、進君の学級では、ラジオのある家は三分の一にたりません。ためになるよい放送だけでもいっしょにきけたらと、進君や三郎君はだいぶ前から頭をひねっています。

七時のニュースがはじまると、進君は立ちあがって郵便さしからきょうの郵便物をとってきました。郵便のかかりは進君です。今晩はおとうさんのところへ手紙が三通、お



かあさんとねえさんへ葉書が一枚ずつです。郵便物には消し印があるので、何日かかって届いたかということがたいていわかります。進君はさいしょ、ふとしたことから、差し出された土地と、着くまでの時間とをくらべることに興味をもちだしたのですが、このごろでは、そのために特別のノートをつくって記入するようになりました。そのなかには、記録のページと、かかった時間の表と、日本地図とがつくられています。遠いところからくるものなど、時にはふだんの二倍もかかってくることがあります。原因をしらべることのできないのは残念ですが、ラジオで大水や大雪などのニュースが放送されたりして、なるほどと思いあたることもあります。おとうさんのところへは、お仕事の関係で、ずいぶん方々の府縣から手紙がきますので、進君はもうどこからくるのでも、いく日ぐらいかかるものか、おおよそのけんとうがつくようになりました。おとうさんもなかなか便利だといって、よくたずねられるようになりました。

進君はだんだん通信のことがおもしろくなってきました。それで、上の山のにいさんから本を借りて、大昔からの通信の話や、発達の歴史を読んだりしました。近ごろは郵






便がおそくなったといわれますが、昔にくらべれば、まだまだ問題にならない速さです。通信の方法は交通機関の発達によって、しだいに進んできたといえます。しかし必ずしも交通機関ばかりでなく、電信電話やラジオが発明されたので、船や車のかよわない所とでもすぐ話しあうことができるようになってきました。世の中のできごとを知るために、いま私たちのいちばん手ぢかにあるのは新聞です。三郎君は明治時代の新聞の写真を見たことがありますが、ことばもむずかしいし、印刷もあまり美しくありません。新聞は発行部数や内容からいっても、わずかの間にたいへん進歩をしたものです。しかし、最近はとくにラジオがずいぶんひろがってきました。世界のはてで起ったことがらが、すぐ私たちの耳にはいります。そればかりでなく、実況放送などでは、遠くのことを同時に知ることさえできます。いまにもっともっと便利なものが出てくることでしょう。

進君は郵便を手はじめにして、だんだん考えをすすめるうちに、郵便や電信電話や新聞やラジオが、どんなことに役立っているかという問題にまではいっていきました。新聞やラジオは、ただ新しいことをしらせているだけではありません。おもしろいお話の

記事もあれば、美しい音樂の放送もあります。進君のおかあさんは放送劇がすきで、いつもその番組を樂しみにしていられます。弟の誠君は、野球の放送となるとむちゅうです。だから新聞やラジオは、私たちに樂しい時間をあたえるという働きももっているわけです。

進君は新聞とラジオの役目として二つのことを考えました。私たちに新しいできごとを知らせてくれることが一つで、私たちを樂しませてくれることがもう一つです。ほかには役目はないでしょうか。進君はいく日も考えつかないでいましたが、そのうち「英語会話」の時間を思い出したので、第三の役目に氣がつきました。新聞やラジオは私たちを教育してくれます。私たちは新聞でりっぱな意見を読んだり、有益な記事を見たりします。ラジオでも外國語を勉強したり、ためになるお話をきいたりします。これからは学校での勉強のほかに、新聞やラジオなどが大きな手助けをしてくれることでしょう。

進君は今までだいたいこの三つの働きを発見したので、こんやはそのことをおかあさんやおねえさんに話してみようと思っていました。ちょうど夕飯の片づけが早くすんだ



ので、おかあさんやおねえさんも裁縫をしながら進君の考えをきいてくださいました。そしてそのおかげで、ラジオにはまだまだいろいろな働きのあることがわかりました。

たとえば天氣予報のようなものも、ずいぶん役に立ちます。都会でももちろん役立ちますけれど、農村と漁村ではとくに大きな働きをもっているといえます。またラジオがひろがってからは、村でもたいへん時間が守られるようになってきました。これは目立たないようでも大きなことです。新聞やラジオの大きな役目はだいたいはじめの三つと考えられるのですが、天氣予報や時間の励行のような働きは、まだほかにもたくさんありそうです。進君はいつかそれを表にしてみたいと考えています。

進君はその夜、床にはいると、このように通信の発達した時代に生まれてきたありがたさをしみじみ考えました。しかし新聞やラジオが十分に力を出すためには、どれだけ

たくさんの人の努力がいることでしょう。こんな夜おそくにも電信を打ったり、電話をかけたり、印刷をしたり、記事を書いたりしている人たちがたくさんあるはずです。またこれだけに発達するまでには、どれだけ多くの人の苦心がつみ重ねられてきたことでしょう。そう思うと、進君は、こうしてゆっくりとねているのが申しわけないような氣さえしました。あれこれと考えてみると、通信の方法の発達しなかった昔はどんな生活だったろうか、という疑問もわいてきました。今から考えてみればたいへんな不便ですが、そのころの人たちはたいして不自由にも思わなかったかもしれません。とにかく進君は、昔のこともぜひ知っておきたいと思います。

**次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょうか。**

1、話しあいのときなどに、自分の考えをよくわかるように人につたえるにはどうすればよいか、考えてみること。

2、読書ノートをつくること。

3、通信のための施設や機関についてしらべること。



## 七、町からの手紙

夏休みもいつのまにか過ぎて、第二学期がはじまりました。

きょうは学級委員の改選が行われました。三郎君もくに子さんも学級委員になり、級長の山本君もこの学期は学級委員として働くことになりました。新聞の係も、三郎君、くに子さん、はる子さんのかわりに、新しい人たちが三人はいりました。はる子さんはこんどは鶏舎係になりました。大部分の人が新しい仕事を受けもって、氣分も新しくなったようです。

学級委員は、さっそくこの学期の仕事の計画を相談しましたが、山本君からもくに子さんからも、学級の標語についていろいろな意見が出てまとまりませんでした。先生におうかがいする必要もあるので、結局あしたのさいしょの時間に、みんなにもきいてみようということになりました。

帰途についた三郎君は、縣道をいつものように小川にそって、ぽくりぽくりと歩いて

いきました。きょうはくに子さんたちと別です、学級委員としての仕事を考えると、三郎君の心はなんとはなしにはずんできます。あしたからの学級の生活をどういうふうに進めていこうか。この学期の共同作業には何をえらんだらいいだろうか。そう思うと、三郎君の胸のなかには、いろいろな新しい考えが、ちょうど入道雲のようにもくもくとわいてくるのでした。いくてには、白い縣道が、かぎりない希望のようにぐんぐんのびています。むちゅうになった三郎君は、いつのまにかふだんの悪いくせが出て、くつの先でぽんぽん小石をけっていることにもしばらく氣づきませんでした。

家に帰って自分のへやにはいると、机の上に小包が置いてありました。どっしりと手ごたえのあるぶあつい包みです。裏がえしてみると、神戸のおじさんからでした。おじさんからは、夏休みのはじめに一度お便りがあったきりです。でも、御本だな、と三郎君はすぐに思いました。ていねいに包みをといていると、とつぜんの贈物で自分をびっくりさせようとしている、いたずらずきのおじさんの顔がうかんできました。いつも明かるい、しかも思いやりの深いそのおじさんが、三郎君は昔から大すきでした。三郎君



にはその小包をひらくことが、遠くにいるおじさんにほんとうにお会いすることのような氣持がしてきました。急に思いついて、井戸ばたへ走っていくと、三郎君はいきなりつめたい水をくみあげて手や顔を洗い、思うぞんぶんうがいをしました。神戸ってどんなところだろう。ひどく燒けたというがどれくらいに復興しているだろう。おじさんにはもういいお家がみつかったかしら。三郎君の頭のなかでは、いつかのおじさんのお話がぐるぐるかけめぐっていました。

おじさんからいただいた書物のひとつは、子どもたちのためのお話を集めたものでした。三郎君は、おじさんがなぜこの御本を送ってくださったか、よく考えてみたいと思いました。おじさんは去年の夏、いろいろ御苦労をなさって、海のむこうの中國から帰ってこられたのです。一年前、帰國してすぐたずねてくださったとき、おじさんはたいへんやつれていられました。でも半月ばかり家で疲れをお休めになった間に、おじさんは外地の珍しいありさまや人情について、いろいろためになるお話をしてくださいました。三郎君がことに心をひかれたのは、戰爭がおわってから、むこうにいた人たちが、

どんなに力をあわせて困苦にうちかったか、また中國の人たちのなかに、どんなにあたたかい心の持主がいたか、というようなことについての美しいものがたりでした。おじさんはたいそうお話もじょうずで、まるで目に見るように話されたので、しまいには、おとうさんやおかあさんまで加わって、夜のふけるのを忘れることもたびたびあったくらいでした。

おじさんのくださったその本には、いちばんはじめに次のような文がのせてあります。

## 小さい友のために

もうかれこれ七、八年も昔のことでしょうか。ある日、私のところへ、ひょっこり外國から便りが届いたことがあります。うわ書きが見なれない横文字なのと、はってあった切手がめずらしいのとで、小さい娘は大得意で私に届けにきました。見ると、たどたどしいローマ字で、ていねいにあて名が書いてあります。私にはひと目で、それがアンリという少年の手紙であることがわかりました。

アンリ君はそのころ、まだきっと十になっていなかったことでしょう。私とはじめて知りあった時が、たしか七つか八つでしたから。海のはるかかなたからはこばれてきたこの小さな手紙を、てのひらにのせてながめていると、私の胸のなかには遠いヨーロッパの思い出がしずかに流れていきました。私は十年ほど前、勉強のために二年あまりフランスに滞在したことがあります。その間、たいていはパリに住んでいたのですが、時には南フランスのいなかを旅したり、セーヌの流れをさかのぼってみたりしたこともありました。アンリ少年はそのころの小さなお友だちのひとりなのです。

アンリ君は、私の数あるフランスの友のなかでも、いちばん心に残るなつかしい友だちです。しかし、そのころにももう、日本にはふたりの子どもさえあったおとなの私が、どういうわけでこのような小さい友だちをみつけたのでしょうか。きょう、私は、みなさんにそのお話をきいていただきたいと思います。

ある美しい秋の午後のことでした。私は大使館の友人の自動車にのせてもらって、パリの郊外へ散歩に出かけたことがあります。郊外といっても、自動車でたっぷり二時間かかるのですから、あたりの景色は、もうすっかりいなからしくなってきます。ちょうど友人に用のある村で車をおりると、友人の帰る時刻のくるまで、私はそのあたりをぶらぶら歩いてみることにきめました。

空は底の知れないほどすみとおって、少しずつかたまって浮かんでいる雲が、くっきりと目にしみるようでした。なだらかな起伏をもった小麦畑の間の白い道の上に、秋の日がいっぱいに降りそそいでいます。左手の方には、あまり遠くないところに、四、五軒の農家が見えて、ゆっくりと大

きな水車がまわっていました。進んでいくにつれて、ゆくてに小さく光っている教会の塔が、だんだんはっきり見えてくるようになります。小川にかけられた橋のところでは、つりをする老人にも出あいました。こんな時、のんびりした牛のなき声をきいたりするのも、なにか楽しいものです。

しかし、めずらしく日ざしが強かったので、歩きつづけていた私は、しだいに汗ばむような氣がしてきました。それで、とあるくるみの小さな林のなかにはいってみると、そこは、ちょうど草もあまり深くなくて、腰をおろした感じになんともいえないやわらかみがあるのです。あおむけになって休んでいると、ほおにふれる草がひやひやとして、夢の國にでもさそわれていくように思われるのでした。

それからどのくらい時がたったのでしょうか。あまり心持がよいので、いつかうとうとしたものとみえます。低いかん木のしげみを通してきらきらかがやいている太陽は、もうだいぶん西にかたむいているようにも思われます。すっかりつかれのやすまった私は、大きなのびをしながらからだを起してみました。

すると、やはりこの林のなかに、くるみの葉かげをあみのように全身にうつしながら、ふたりの子どもが、私の方を見て立っているではありませんか。ひとりは十をこしたばかりとみえる小がら



な女の子です。白い質素なうわぎに、えりにさした黄いろい野菊の似あうやさしい顔だちでした。もうひとりは、目のぱっちりしたかしこそうな男の子で、これはひと目で弟だということがわかります。姉は、片手にくりをいっぱい入れた小さなかごをさげ、もう一方で弟の手をひいていました。外國人がめずらしいのでしょう。男の子はなにかいいたげに姉を見るのですが、女の子はだまって私を見つめているばかりです。

「ぼうや、くり拾いかい。」

私がほおえみながら口をひらくと、男の子はまた姉にめくばせをして、ちょっとうなずきました。

「どう、しばらく、おやすみなさい。」

きょうだいを私のかたわらにすわらせるためには、なおしばらく骨を折らなければなりませんでした。しかし、いったん話をはじめると、私たちは、すぐなかよしになりました。二、三十分も話しているうちには、私たちは、もうずっと昔からの友だちのようにうちとけていたのです。きょうだいの家はやはりこの近くの農家で、名まえは、姉をルネ、弟をアンリとよぶこともその時知りました。

「おじさん、日本のお話してよ。」

ルネさんはさすがに日本という國のあることを知っていました。

前に一度、日本の人が村にきたことがあるのだそうです。草の上で話がはずむうちにも、ふたりは、ポケットから燒いたくりをとり出して、私にすすめてくれました。また、のどがかわいたといいだすと、ルネさんは、大いそぎで水をとりにいってくれたりもしました。その水のおいしかったことを、私はいまも忘れません。

しかし、やがてあしのはやい秋の夕やみが、ひたひたとあたりにしのびよってきました。ふりむくと、西の空がまっかにもえています。ふたりは、ぜひ家に寄れというのでしたが、私はおそくなるのでまたくる日を約束しました。別れる時、アンリ君はせのびして、私のポケットに、いっぱいくりをつめてくれました。

私はそれから、たびたびアンリ君の家をたずねることになりました。御両親もたいそうまじめな明かるいかたで、いつもあたたかいもてなしを受けました。そのうちアンリ君のきょうだいばかりでなく、そのなかまの村の子どもたちとも、だんだんなかがよくなっていきました。みんなで樂しい野遊びをしたこともあります。そんな時、遠いフランスのいなかの子どもたちは、まるで自分が東洋の日本にきてでもいるかのように、耳をすまして私の話にきき入るのでした。

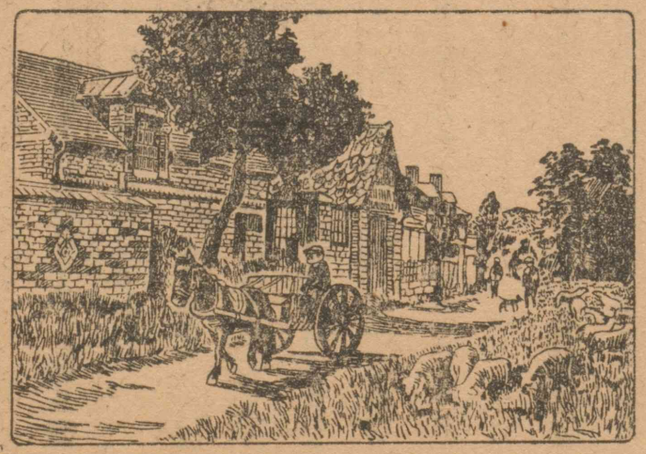
フランスのいなかは、どことなく日本に似ていると思います。私は子どもたちと話しながら、ときどき日本に帰ったような氣持になることがありました。生まれた國をはなれて、外國に住むさび



しさは、ちょっと経驗のない人にはわからないくらいのものです。しかしそのさびしさを、小さな友だちとのあたたかいまじわりが、どれほどなぐさめてくれたことでしょうか。住むところも遠くへだたり、話すことばも生活のしきたりもちがっている私たちが、へだてなくあたたかく心をかよわすことのできることほどありがたいことはありません。私はアンリ君たちのなつかしい思い出が、私の心の奥にのぼって、いつまでも消えないともしびのような氣がするのです。

三郎君はそこまで読んできて、本をとじました。そして靜かにあおむけになりました。

庭の八つ手の葉には、まだ強い夕日がいっぱいに照りつけています。せみの声が急にうるさく耳につきます。しかし、三郎君の心のうちには、なんとなくしっとりとあたたかい



フランスのいなか

ものがわきあがってくるのです。三郎君は目をつむって短かいため息をつきました。そのしみじみとしたなつかしいものは、おじさんのおもかげのようでもあり、また、いま読んだ人の心の奥にともるともしびといったもののようにも思われます。しかし三郎君には、どこか遠い昔の思い出がよみがえってきたようにも思われるのでした。

その晩、三郎君はおじさんにお礼狀を書いてしまうと、いつものように日記をつけました。日記には読んだ本の感想を書きました。本のなかには、お友だちをたいせつにしよう、というお話もありました。三郎君はそれを読んだ時、東京へ帰った信一さんのことを思いました。三郎君が日記をつけはじめたのも、もとはといえば、信一さんのおかげでした。その信一さんはいつも、「友だちはだいじなものだよ。」といっていられたのです。

信一さんは三郎君より六つも年上です。戦争中疎開してこられて、町の中学にかよっていられたのです。にいさんと同級で、しじゅう三郎君の家へ遊びにこられたのが、三郎君となかよしになるはじめでした。信一さんは弟がいないので、三郎君をかわいがっ



て、よく遊び相手になったり、散歩につれていってくれたりしました。ふたりでつばめのために住みよい巣をつくってやったこともあります。病氣の犬をせわしてやったこともあります。三郎君は、信一さんがいっしょにいてくれたあの二ヶ年ぐらい樂しかったことはないように思います。その思い出は、三郎君の心のおくに、それこそいつまでも消えないあたたかいともしびのようにかがやいているのです。

## 三郎君から信一さんへ

信一さん。こんどの夏休みにはきっときてくださると思って樂しみにしていたのに残念でした。急に肺炎をおこされたときいたときは、みんなたいへんおどろきました。でもこのあいだ、にいさんからもうだいぶ元氣になられたということをきいて、やっと安心しました。でもあとがだいじですから、どうか無理をしないでください。

ぼくは、ことしはたいそうおよげるようになりました。もうふたご岩までいって帰ってくることができます。まだ形はよくないのですが、クロールだってできるようになりました。また波のりもずいぶんじょうずになりました。いっしょにおよいでいただけな

かったのが残念です。ことしはこむらがえりなんかおこすこともありませんでした。ぼくがいつも準備運動をやるので、組のなかまや、もっと小さい子まで、まねをするようになりました。ぼくのおしらせしたいのは水泳のことばかりではありません。あまりたくさんあって、どれから書いていいかわからないくらいです。

ぼくたちが五年生になって、みんなで共同していろいろの研究をはじめたことは、もう前におしらせしました。今までのように、なんでも先生におききすればすむというわけにはいきませんし、むずかしいことにもぶつかりますが、みんなで心をあわせてがんばっています。とうとうやりとげたときのうれしさは、ちょっと口ではいえないくらいです。学習がこんなにおもしろいものだとは、ぼくも今まで知りませんでした。

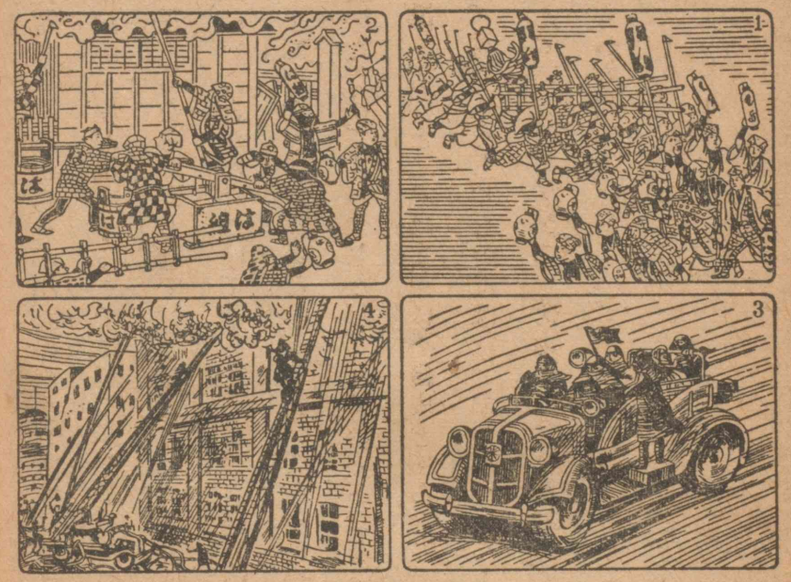
この夏休みの仕事の一つとして、ぼくは乳牛を飼うことについてしらべました。信一さんが御存じのように、家では乳牛を飼っています。乳牛を飼うことがどんなにたくさんの人たちの役に立つか、またどんな人たちのおせわになっているか、というようなことをしらべて、家業の研究をしたわけです。こんどいらっしゃったら、見ていただきたい



と思っています。

ことしはずいぶん牛の草を刈りました。川ぶちの草も、山の草もとりにいきました。朝起きると、もうすぐにいさんといっしょに草刈りです。朝露でびっしょりぬれますが、一時間もすると、どうやら朝の分だけはとれます。草をもって帰ると、今度は町まで牛乳をもっていくのです。夕方涼しくなると、また草刈りです。牛は元氣でよく乳を出しますが、草もずいぶんたべます。夕方の草刈りは、にいさんとこうたいすることもありました。その時は、ぼくが畑の草とりです。草とりもずいぶん早くなりましたよ。しかし、おとうさんとにいさんとぼくと三人がかりでも、田の草、畑の草にはなかなか追いつけないのにはびっくりしました。時にはなにかうまい道具はないかしらと考えるくらいです。でもことしは、よその畑に負けるようなことはありませんでした。

さつまいもも、もうずいぶん大きくなりました。もう第一回の供出をしましたよ。東京で配給になりましたか。学校のごつごうがついたら、静養かたがたいらっしゃって、さつまいもやお魚をたくさんめしあがってはどうですか。ぼくの牛の乳ものんでみてく



ださい。にいさんやおとうさんもそういっていられます。そしたら、いろいろおもしろいことがあるんですが。

もう一つおしらせすることがあります。先月の二十二日に、新田の数夫さんのうちでぼやがありました。去年から数夫さんのうちの納屋に、満州から引きあげてきた準一君たちが住んでいるのです。準一君たちは草とりに出ていて、おかあさんと妹さんがお家にいたのですが、おかあさんが急に配給かなにかの用で出かけられ、なかなか帰られないうちに、おなべをかけてあっ



た電氣こんろから火が出たのだそうです。妹さんは家の近くに遊んでいたそうですが、納屋から煙が出てくるまで氣がつかなかったのです。

子どもたちがみんなで、「火事だよう。」と叫んだので、数夫さんのお家の人や近所の畑にいた人がかけつけて消しました。さいわい数夫さんのお家では、貯水そうに水をはっておいたので、電氣こんろのおいてあった台や、床や壁のほか、ふとんや着物を少し焼いただけですみましたが、とにかくあぶないことでした。

準一君のところはまきに不自由をするので、電氣こんろを使ってとんだ失敗をしました。村の人たちのなかにはだいぶわるくいう人もありますが、せまい納屋に親子五人が住んでいるのですから、荷物は少ないといってもやはりらんざつになります。それになにもかも間にあわせなので、無理ができるのもしかたがないところがあると思います。それより、準一君たちがいっそう困ることだろうと、お氣の毒でなりません。それに、そのぼやのあと、無理をなさったために、おかあさんはからだをわるくされているのです。ぼくたちは、みんなで準一君に元氣をつけることにしました。準一君に、「かれ枝拾

いにいくときは手つだってあげるよ。」といったら、ほんとうにうれしそうでした。くに子さんたちの意見もあって、学用品をあげたり勉強の手つだいもすることにしました。

ぼくたちが、自分の学用品のなかから少しずつ出しあっておみまいにいったとき、準一君のおかあさんは、やすんでいられたのを起きてこられて、涙をためてお礼をいわれました。ぼくたちもなんだか胸があつくなって、ことばがつかえました。準一君はしょんぼりしていてはずかしそうでしたが、出てきてみんなにあいさつしました。

家で準一君のお家のようすをお話したら、おかあさんも涙ぐんできいていられました。おとうさんは、運のわるいときには失敗も起るのだ、だからそういうときのなんぎは。みんなで分けあってあげるのがほんとうだとおっしゃいました。おかあさんは着物をもっておみまいにいかれたようです。

信一さん、ぼくはきょうも砂丘の上にすわって、青い青い海の色を見ました。太陽がきらきらと水の上にかがやいています。空にはぽっかりとちぎれ雲がうかび、その雲に日がかげると、寄せてくる波のほがはらはらとくずれるのが見えたりします。そんなと



き、ぼくは信一さんもいっしょにすわっているような氣がしてなりません。

こん学期から新聞係をやめて学級委員になったので、このごろは二学期の学級の仕事についていろいろ考えています。野球の試合や運動会のこともあるし、展覽会や学藝会のこともあるし、とり入れのころの手つだいの計画や、冬のしたくのこともあって、信一さんがそばできいてくださればどんなにいいかと思います。

## 信一さんから三郎君へ

ありがとう、三郎君。この夏おたずねできなかったことは、ぼくもたいへん残念に思っています。うっかりかぜをひいたのを無理してこじらせてしまい、みなさんに御心配をかけました。母は養生のためにも出かけてみたらといったのでしたが、半月以上もねて、すっかり予定をくるわしてしまいましたので、三郎君にはわるいと思いながらやめたのです。冬休みにはぜひおじゃましたいと思っています。

今までのお便りで知らせてくださった三郎君たちの活動は、どれもこれもずいぶんりっぱだと思います。とくに、この世の中が人々の助けあいで成り立っている、というこ

との発見は、たいへんうれしく思いました。

三郎君は牛乳をのみにこいといってくださるのですが、きみが毎朝町にもっていってくれる牛乳が、ひょっとすると、ぼくがこのあいだ病氣のときにいただいた牛乳であるかもしれませんね。なかなかそううまくいくはずはありませんが、三郎君が牛乳を集乳所へもっていってくれなければ、東京へくる牛乳もそれだけ少なくなり、ぼくみたいな臨時の病人のところまで配給してもらえなかったかもしれません。三郎君はきっと、夏休みの研究で、きみのお家の牛乳がどこへはこばれていくかを知ったことと思います。しかし、結局どんな人がのんだかまではわからなかったでしょう。

しかし、牛乳というもので、遠くはなれたふたりが結びついているのはなかなかおもしろいことです。ぼくは牛乳をのんだとき、これがぼくの口にはいるためには、どんなにたくさんの人の手がかかっているかを考えてありがたいと思いました。三郎君のような人もいれば、消毒をしたり、都会へ運送したり、ぼくの家にとどけてくれたりする人もあります。もっと考えていくと、牛を育てたり、びんをつくったりした人もいるはず



です。牛乳ばかりではありません。いま机にむかって手紙を書いている自分のまわりをちょっと見てみただけでも、ぼくひとりでつくり出したものなど、一つだってないといえます。そう考えてみると、私たちの生活は、非常にたくさんの人々の生活としっかり結びついているということができるでしょう。どの品物のうしろにも、それをつくり出したたくさんの人たちがひしめきあっています。たとえてみると、私たちは、この社会の中で、ちょうど網の目のようになって生きているといえるではありませんか。

三郎君、私たちはまだどれほども世の中の役に立たないにしても、やはり網の目の一つであることにまちがいはありません。網の目は助けられるばかりでなく、また助けなければいけないものです。見ず知らずの人だからといって、知らない顔をすることはできませんね。汽車でのりあわせたり、道で会った人たちでも、やはりたどってみれば、網の目の上からは親類なのですからね。

でも三郎君、私たちはこのような網の目でつながっているばかりでなく、また祖先と子孫という形でもつながっています。三郎君が生まれたのは、おとうさんとおかあさん

がいらっしゃったからです。そのおとうさんにはまたおとうさんとおかあさんがあり、おかあさんにもおとうさんとおかあさんがいられます。そういうふうに、ずっとたどっていくと、きみの祖先は、おどろくほどたくさんの人たちだということになるでしょう。しかもよく考えてみると、いつかこの世の中に生きていた祖先のひとりひとりが、やはり私たちの現在の生活にいろいろたいせつなつながりをもっているのです。乳牛のことを例にしていうと、よい乳をたくさん出す牛をつくり出すためには、ずいぶん長い年月と多数の人々の苦心とが必要です。ですから、現在牛を飼ったり、牛乳を都会へはこんだりしている人の働きのほかに、そのように牛乳の改良ということに力をつくした人の働きもみのがしてはならないと思います。いろいろな進歩や発達は、結局、人間の共通の財産をふやしていくということです。そのために努力した人々に対しても、さきにいった網の目というものを、ひろげてあてはめてみることはできないでしょうか。そうしてみてはじめて、じっさいの社会の姿が考えられてくると思います。

一本の鉛筆をとりあげて考えてみても、このようにくみあわさった網の目ははっきり



わかると思います。どれだけたくさんの人たちの苦心や骨折りが、小さな鉛筆のなかにこめられていることでしょう。それを考えれば、私たちはいっときもぼんやりすごしてしまうことができないと思います。私たちは、数知れないほどたくさんの祖先がなしとげた仕事のつみ重ねの上に生活しています。私たちがそのような恩恵を受けているということには、またそれだけ重い責任があるのです。網の目はどこまでもどこまでもつながっていますが、またいつもわれわれが出発点に立っていることを忘れないでください。

この世の中が人々の助けあいだ、ということはまちがいありません。しかし、そのことは、もういまのままでその助けあいが十分だというのではないでしょう。それだからこそ、私たちがおたがいに責任を重んじて、努力していくことが必要になるのです。もっともっと、あたたかい人間らしい助けあいがなくてはいけないと思います。それでは、人間らしい助けあいとはどういうことをいうのでしょうか。それはみんなが自分たちの助けあいということをよくよく考えて、だれにでも心からしんせつがつくせるようになることだと思います。近所の人たちはもちろん、他の地方の人や外國の人々ともよ

いお友だちになることだと思います。そのような世の中では、争いということも、貧乏ということも、きっとなくなっていくにちがいありません。

準一君とおかあさんはたいへんお氣の毒です。そういう人たちにとっていちばんありがたいのは、人の心のあたたかさということでしょう。三郎君たちの仕事はたいへん尊いと思います。準一君が早く元氣になるように、できるだけはげましてあげてください。決してあわれんであげるのではありません。そのような不幸にあわれた準一君に心から同情して、元氣に立ちあがっていただくために、よろこんで力になるのです。昔はお金持だからといっていばったり、貧乏人だからといってえんりょしたりした子もありました。どんなことでも、世の中のためになる仕事をまじめにつとめている人は尊いように、そまつな身なりをしていようと、りっぱな子はりっぱなのです。しかし私たちは、まだちっぽけな負けん氣やねたみにとらわれて、町のものがいなかの人をうらやんだり、いなかの人が町のものの不平をいったり、同じ村の中でさえいがみあうことがないとはいえません。でも私たちはいつも、あの大きな網の一つの目であることを忘れないで、



かたくかたく結びつき、大空のようにひろいあたたかい心を養っていきましょう。私たちの團結、それが新しい日本の姿です。

**次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょう。**

1、自分の学級の役員選挙はうまくいっているかどうか考えてみること。
2、二学期の学級の仕事の計画を立てること。
3、遠い所に住んでいる親類の人の表をつくること。
4、外國の人たちの人情や風俗のことを、外國にいっていた人にきいてみること。
5、外國人との交際のしかたについて考えてみること。
6、疎開の人たちや引きあげの人たちが、どんなことに不自由をしているかしらべてみること。
7、村で起りやすい火事の原因と予防法をしらべてみること。
8、人と人とを心からむすびつけるのをさまたげる、さまざまの偏見やせまい心持をとりのぞく方法を考えること。
9、遠くにいる友だちに手紙を書くこと。
10、公共の機関をできるだけ多くあげ、そこではどんな人たちが働いているかしらべること。

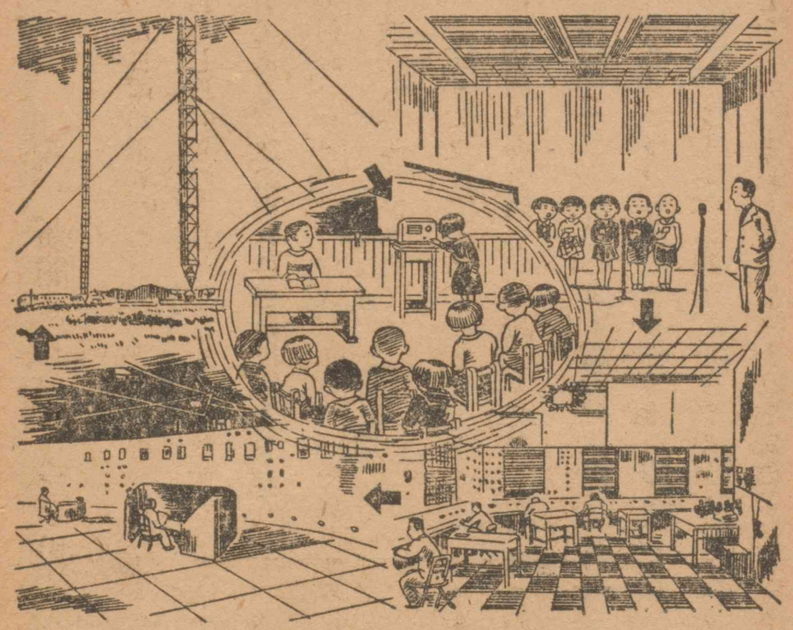
## 八、新聞やラジオのなかった時代

毎日雨がふりつづいて、またつゆがきたようです。三郎君は、けさ教室にはいると、おもしろいものをみつけました。教室のなかにマイクロフォンとラウドスピーカーがおいてあり、放送局の絵がかけてあったのです。さきにきたものが、マイクロフォンの前で何かいうと、ラウドスピーカーがそれを大声につたえています。みな思い思いのことを放送してみているのです。

進君がにこにこして、こんどラジオのことを勉強するのだといっています。進君たちは、きのうの日曜日、学校にきて先生のお手つだいをしたそうです。

先生がおみえになって、みんなで研究すること、やってみることがきまりました。そして仕事のわりあてについても話しあいました。放送する劇の脚本をつくる組も、ラジオのことをしらべる組も、マイクやスピーカーの取扱いかたをならう組も、放送局のことをしらべる組もできました。三郎君はすみ子さんといっしょに進君を手つだって、新





聞やラジオのもっている働きと、そういうものがなかった時代に、そのかわりをしていたものとについてしらべることにしました。

進君は前から郵便のことをしらべていたのですが、夏休みに新聞やラジオのことをいろいろ考えて、次のような表をつくっていました。そして昔のことをしらべようといいだしたのです。進君の考えは、むずかしいという人もありましたが、三郎君も、このあいだから、昔の人たちはどんな生活をしていたかということ

を考えてみたいと思っていたので、進君といっしょに研究することにしました。

| ラジオのはたらき | 新聞のはたらき |
| --- | --- |
| 1 世の中のできごとを人々にしらせる。 | 同じ。できごとの種類が多いが少しおそくなる。 |
| 2 人々の意見をつたえる。 | 同じ。 |
| 3 音樂や劇やスポーツの放送で人を樂しませる。 | お話や小説、劇やスポーツの記事で人を樂しませる。 |
| 4 時事解説や英語講座などで、勉強させてくれる。 | 論説や学藝欄などで、いろいろな学問を教えてくれる。 |
| 5 天氣予報をしらせる。 | 同じ。 |
| 6 時刻をしらせる。 | 毎日の暦をしらせる。 |

三郎君とすみ子さんと進君の三人が、この表をラジオの番組や新聞の記事とあわせてしらべ、いろいろと話しあってみた結果、もうひとつ大きな働きのあることに氣がつきました。それは、ラジオでは、放送局や役所からのしらせ、ことに配給とか、人を求めることとかのしらせがあり、新聞には、そのほかに、会社や商店の廣告がのせられてい



るということです。

それから三人は、現在このようにラジオや新聞の受けもっている仕事が、昔はどんなものによってはたされていたかをしらべていきました。めいめいで本を読んだり、雜誌を見たり、おとうさんやおかあさんからお話をうかがったりして、それを帳面に書きぬき、おたがいにくらべあわせ、まとめて学級の人たちに報告して、意見をきくことにしました。報告をする日はまだきまっていません。

**次の文は、三人の研究を、進君がまとめたものです。**

ラジオや電信電話・郵便・新聞などが、世の中のできごとをしらせる働きをはじめたのは、わが國ではまだ近ごろのことです。

| | |
| --- | --- |
| ラジオ放送の開始 | 大正十四年（一九二五） |
| 電信のはじまり | 明治四年（一八七一） |
| 電話のはじまり | 明治十年（一八七七） |
| 海底電線の敷設 | 明治八年（一八七五） |

郵便制度の制定　明治四年（一八七一）
日刊新聞の発行　明治二年（一八六九）
鉄道の開通　明治五年（一八七二）
自動車の輸入　明治四十年（一九〇七）
航空郵便
旅客航空　昭和四年（一九二九）

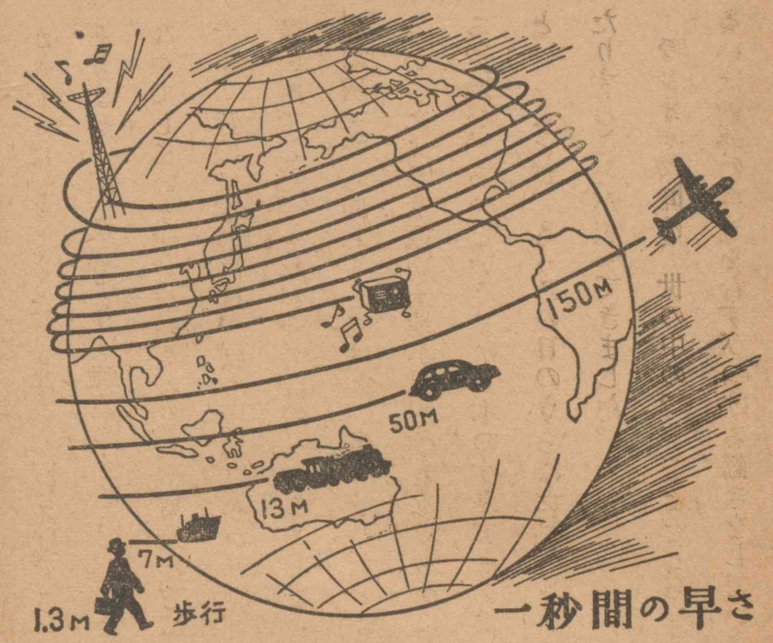
だから江戸時代でも、はなれた土地の人にできごとをくわしくしらせるには、馬とかかごにのって使いの者がかけつけるのがもっとも早い方法でした。今から二百四十年ばかり前、江戸をたった早かごが、東海道を夜を日についで走り、六六〇キロを少しの休みもなくリレー式に走り通して、播州赤穂についたのが四日ののちだったといいます。それがそのころのレコードでした。手紙でしらせようとしても、その土地へ旅行する人がみつかるまで待っていなければなりませんでした。大名とか大きな商人とかは飛脚というものを使いましたが、これも人がもっていくのですからずいぶん日数がかかりました。

昔は、いっぱんの人はそう遠い土地のことを氣にしないですみました。だからあまり



手紙も書かず、用のあるときは、自分ででかけていってすませていました。世の中の新しいできごとも耳づたえにきくほかに方法がなく、それだけでがまんしていたのです。耳から耳へとつたわっていくのですから、だんだん話が大げさになったり、まちがったりすることも少なくありませんでした。話は人のいききの盛んな宿場とか、町などにいちばん先につたわり、村の方へは、町から物賣りにきた商人や、村から町へ品物をはこんでいった人などを通してつたわっていきました。諸國を行商してあるく藥屋とか呉服屋、小間物屋などは、おもしろおかしくほかの土地のありさまを人にきかせて、それをあいきょうに商賣していったものです。

明治になって交通や通信が急に発達したわけは、外國の進んだ方法を学んでとりいれたからです。しかしそのまたもとには、國じゅう世界じゅうが、昔にくらべてはるかに強く結びつけられてきたということがあります。昔は人がせまい土地にたてこもって生活していました。江戸時代でも、農民は自分の土地をすてて他の土地に移ることがたやすくはできなかったし、まして海外に出ていくことなどは思いもよりませんでした。そ




## 一秒間の早さ

んなふうですから、國内の交通や通信の方法もあまり進歩をしませんし、まして外國との交通や通信などは、ほとんどなかったのです。それが明治からあとは、日本國じゅうが一つになり、昔のように藩と藩との間の強いしきりがなくなったので、関係の深い土地と土地とをむすびつける交通や通信が発達してきました。そして交通や通信が発達するのにつれて、また土地と土地とがいよいよ密接な関係をもつようになりました。外國と日本との交通や通信も、これとまったく同じです。



交通や通信の発達ということを考えにいれると、土地の遠いとか近いとかいうことはかんたんにいえなくなります。たとえば、ここから山のかいこん地までは八〇キロしかありませんが、東京よりは郵便がくるのに日数がかかるし、使いを出しても三日がかりになってしまいます。だからむしろ、東京の方がかいこん地より近いといってもよいわけです。昔の日本の國は、ばらばらにわかれた、すみからすみまでたいそう日数のかかる廣い國でした。それが今では、一つのまとまったせまい國になってきたのです。これは他の國々でも同じことですし、世界ぜんたいについてもいえることです。昔は夢にも見なかったような遠い土地が、もうとなり近所になってきました。アメリカで流行している音樂が、あっというまに日本のすみずみまでいきわたったり、日本に大地震があったということが、もうその日のうちに世界じゅうに傳わって、しんせつなおみまいを受けたりすることが起ってきました。

ラジオや新聞は、世の中のできごとをしらせるというだけではなく、國内の各地、あるいは世界の各地をむすびつける働きをしています。こういったもののなかった時代に

は、人々はみなその土地その土地にわかれて、別々の生活をしていたわけです。それは静かであったかもしれませんが、せまい単調な生活であったと思われます。

**次の文は、三人の研究を、すみ子さんがまとめたものです。**

ラジオや新聞には、人々に樂しみをあたえてくれるという働きがあります。ラジオは音を通して、新聞は写眞や絵や文字を通して、私たちに樂しみをあたえてくれます。

ラジオや新聞のなかった時代にも、人々は音を通して、また絵や文字を通して樂しみを味わわなかったわけではありませんでした。ただそれは、その土地土地にかぎられたものが多かったようです。村では琴やしゃみせんをひける人もめったにいませんでした。だから音による樂しみといえば、田うえ歌とか茶つみ歌などの民謠を歌ったりきいたりすることのほかには、お祭のときの笛とか太鼓があるくらいのものでした。音だけの樂しみではありませんが、しばいなども、村ではときに自分たちでやってみるくらいで、ごくまれに旅藝人でもまわってきたときには、村じゅうの人が見にいったそうです。ラ



ジオでしばいを見ることはできませんが、放送劇などをきいていると、なんだか目に見えるような氣さえして、つくづく便利になったと思います。

新聞や雜誌がなかったのですから、絵や文字を通しての樂しみは、絵草紙とか書物とかによったのです。江戸時代になってからは、木版の印刷が行われましたから、村のほうにも、少しはそういった本がはいってきましたが、種類も部数もごく少なかったのです。だからおもしろい話などは、人にきかせてもらったり、人の集まったときに話しあって樂しみました。同じ江戸時代でも、町に住んでいた人たちは、その点ではよほど樂しみが多かったようです。琴やしゃみせんをひく人も多いし、うたいとか長うたとかいったものをうたう人も多く、寄席にいってびわをきいたり、講談をきいたり、しばい小屋へいってかぶきやおどりを樂しんだりすることもできました。絵草紙や書物も町では手に入れやすかったようです。そのかわり、町の人たちのなかには、遊びにふけって家の人たちにめいわくをかけた人もありました。

村では、そういう樂しみは少なく、あっても単調でしたが、田や畑、あるいは海や山

の仕事のあいまあいまには、物日というのがあって、その日は仕事を休んで、餅をついたり、料理をつくったりして、おたがいによんだりよばれたりして楽しみあいました。そのうちでも、お正月とか、鎮守の祭とか、お盆とかは、いちばん楽しい時でした。村の人たちの楽しみには、きちんとしたきまりがあったようです。このごろは、新聞やラジオのほかに、蓄音機もあり、映画もあって、どれもみな村の生活にいりこんできたので、村の人たちの楽しみかたも少しずつかわってきています。

**次の文も、三人の研究を、三郎君がまとめたものです。**

ラジオや新聞は、いろいろ役に立つことを、おとなにも子どもにも教えてくれます。それも、学校で教えてもらうのとは、少しようすがちがっています。おもに、その時々の生活にすぐ役立つようなことで、順序立っていないのがふつうです。季節の草や木の手入れ法とか、季節の料理のしかたとか、時事問題の説明とか、みなそうです。

このようなことは、ラジオや新聞のない時代でもだいじなことでした。日々の生活に



すぐ役立つようなことがらは、おたがいの話しあいのうちに教えられていたものです。若いものどうし年よりどうし、ときには両方がいりまじって話しあうよりあいの場合とか、仕事のあいまのひとやすみのとき、夕涼みのとき、そういうときに教えあったのです。物知りの年よりや、学問のある人、珍しい旅人などが話し手になります。こういうのを耳学問といっていました。

またラジオや新聞は、私たちの知識をひろくしてくれますが、昔の人たちは本をよんだり耳学問をするほかに、じっさいの社会のようすを見るために旅行に出かけていきました。職人などはほかの土地の親方の所へ出かけていきましたし、ふつうの農民や商人はお宮まいりとかお寺まいりといって旅に出ては勉強をしました。高いけわしい山の上のお宮におまいりしてこないうちは一人前に取扱ってもらえないとか、一生のうち一度はお伊勢まいりをしなければいけないとか、かわいい子には旅をさせろとかいうこともその意味からいわれたのです。旅行は費用もかかるし、ひとりでは心細いので、講というものをつくって共同して費用をつみ立て、なかまが何人ずつかでこうたいしてでかけ

たり、一同でいっしょにいったりしました。このふうは今でもだいぶ残っています。

今のような学校は明治になってからできたものです。江戸時代もなかばごろまでは、ふつうの子どもたちに、読み、書き、そろばんを教える寺子屋や、裁縫を教えるおししょうさんというようなものはありませんでした。だから、昔は、家の仕事を手つだったり、奉公にいったり、または旅に出たりして、じっさいについて学ぶのが勉強のおもなもので、それだけしかしなかった人も多かったようです。

三郎君たちは、このようにして、ラジオや新聞のほかの働きについてもしらべています。いまはラジオの時間を知らせる働きについて研究しています。ラジオの発達する前は、号砲（ドン）といって、となり町で正午に空砲をうち、みなが時計をあわせていたということ、それよりも昔、江戸時代には、ふつうの家には時計がなく、お寺の鐘が時を知らせる働きをしていたこと、などがわかりました。また昔の時刻のよびかたもしらべました。ただ、お寺ではどんな方法で時刻を知ったのか、どんな時計を使ったのかは



はっきりしないので、なおしらべているところです。

廣告や天氣予報についてもだいぶしらべることがありそうなので、三人は今までの研究についての話しあいを早くしてもらえるように、先生におねがいしようといっています。

**次のようなことを考えてみたり、してみたらどうでしょうか。**

1、ラジオの番組や新聞の記事のひとつひとつについて、どんな働きをしているか考えてみること。

2、自分の町や村の通信や交通の発達の歴史をしらべてみること。

3、日本と他の國との交通や通信に必要な日数をしらべてみること。

4、村の人々の樂しみを昔と今とくらべて表にしてみること。

5、自分の住んでいる土地の物日を表にして、他の土地の人たちのつくった表とくらべあわせてみること。

6、正しい知識をえるのに役立つもの（ラジオ・新聞等）を書きならべ、その長短を考えること。

7、書物の歴史、および書物のない時代の記録の方法についてしらべること。

8、昔の旅行のありさまをしらべること。
9、いろいろな時刻の知りかたをしらべること。
10、いろいろな天氣予報の方法をしらべること。

## 学校へいく路

冬になって氷がはると、
冬になって雪がふると、
学校へいく路は長くさびしい。
その路を生徒がいく。

だが、また、ゆかいな夏がきて、
鳥がなき、果実がみのり、花がさけば、
学校へいく路は、なんて短かいのだろう！



たのしい時間が、なんとはやく過ぎることか！

しかし、勉強がすきで、
ちえをえようとはげむ子には、
学校へいく路は、いつでも短い。
照る日も、雪の日も、また雨の日も。

どの子も、どの子も、心はけだかく、
何をするにも心をこめて、
いつ話すにも心やさしく、
すべての人のよろこびとなれ。
どんなところにいるときにでも。

ジョン・ラスキン

（附）

## 教師及び父兄の方へ

一、第五学年の児童の生活には、次のような問題が横たわっていると考えられる。これらは、教師や父兄にとっては、児童に対するさまざまの期待や注文の根本になっているもので、児童に理解させ解決させたい問題である。また児童自身にとっては、日々の生活にいれかわり立ちかわり現われてくる。さまざまの意図や疑問の源泉であって、自分でははっきり意識していない場合もあるが、絶えずその解決を求めている問題である。

### 問題

(一) 私たちはどのように勉強すればよいか。
(二) どうすれば、私たちは自分を安全にかつ健康にすることができるか。
(三) 自分・家・学校・町村・國の財産にはどんなものがあり、どのように保護保全されているか。
(四) 現代の産業はいかにして発達してきたか。
(五) 発明発見はどのくらい私たちの生活を豊かにしたか。
(六) どのようにして私たちは通信したり意見を交換したり旅行したりできるか。



(七) 外國人との交際はどのようにして行われるか。
(八) 國家統治にはどんな施設が必要か。

児童の種々な経験は、これらの問題を中心として、豊かになり、深くなって行く。

二、「この本は、児童たちに社会科学習の手がかりを與え、その学習の進め方を暗示しようとして、若干の資料を提出している。しかしその資料は、第五学年の児童に、ぜひ與えなくてはならない知識を精選して排列したものではない。それは範囲からいっても、深さからいっても、たしかに偏している。だから従來の教科書のように考えてはいけない。むしろ、児童用の参考書の一種として取り扱っていただきたい。したがって、この本に書いてあることを、順々に説明したり、暗記させたりしては困る。またこの教科書だけでは十分でもない。」その意味でこの本を第六学年の児童が参考にしたり、第六学年の本を第五学年の児童が借りてきて参考にすることもよいことである。

三、児童たちは、恐らく一息に、この本を読んでしまうであろう。そしてさまざまの疑問をもったり、計画を立てたりするであろう。教師や父兄は、この児童の興味をうまく利用して、前にかかげた諸問題の解決に向け、自分たちの生活を向上する機会を與え、人間生活、社会生活の理解を深めるように、取り計らっていただきたい。

四、各章の終りに示した、児童の考えること、実行することは、児童自身の抱いた疑問や計画とともに、教師の計画した学習活動に、児童を導入するきっかけとして利用することができるであろう。そのためには、教師は必要に應じて、この本の適当な部分を指示して児童に精読させたり、その読後感を求めたりすることも、よいと思われる。

五、この本は、農山漁村の生活に取材しているが、都市の児童もまたそこに、自分たちと関係のある多くの問題を発見することができるであろう。



社会科　小学校第五学年用
村の子ども—私たちの生活(一)
Approved by Ministry of Education
(Date Sep. 6, 1949)

昭和二十二年九月十五日翻刻発行
昭和二十四年十月一日修正翻刻印刷　定價金十五円四十錢
昭和二十四年十一月十五日修正翻刻発行
(昭和二十四年十一月十五日　文部省検査済)

著作者　文部省
発行者　東京都北区堀船町一丁目八五七番地　東京書籍株式会社　代表者　長得一
印刷者　東京都台東区二長町一番地　凸版印刷株式会社　代表者　山田三郎太
発行所　東京書籍株式会社

五年

赤坂東郎